異界のマークスマン

チハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異界のマークスマン

【Ｎコード】
Ｎ２４３７Ｐ

【作者名】
チハ

【あらすじ】
マークスマン（選抜射手）とは、狙撃兵と歩兵の中間である。
狙撃兵程の専門的な装備や技量は無いがより柔軟に戦えるのが強みだ。
そんな主人公がファンタジー世界に召還された。
友は銃のみ。
サバイバルが今始まる。
なお、同時連載中の「ソルジャーミーツドラゴン」とリンクしています。

プロローグ　零点規正（前書き）

零点規正（ぜろてんきせい、ゼロイン）
平均弾着点を照準点へ導く操作。

作者と主人公の好みのせいで、銃器の描写が濃い目注意。
多分、本作のヒロインは６４式小銃です。
２２年１２月３日　装備品名称の補足、サブタイトル改定

プロローグ　零点規正

Ｙ県にある屋内射撃場。
２００ｍの射撃訓練が出来る分厚いコンクリートの塊。まるでチェルノブイリの元原子力発電所、「石棺」のようだ。
そんな中に俺はいた。
外の明かりは一切入ってこない。寒々しい水銀灯の明かりが全てだ。
この射撃場は外見もそうだが、中も心を冷やすような無機質な雰囲気だ。好きになれない。
まあ、もっとも今からすることを考えると不快感も吹き飛んでお釣りが来る。
今からするのは、弾薬の消費だ。
平時でも有事に備えて過剰に弾薬等は生産される。錬度維持目的の通常の射撃訓練では消費しきれない量を、だ。
当然、使い切らないといけない。だから、時折射撃場の盛り土（標的の後ろに弾を受け止める意味で盛ってある土）が変形し土埃で標的が見えなくなっても更に打ち込む位の弾を消費しないといけない。
屋内で撃つので銃声が反響する。耳栓をしていても苦痛に感じる程の大音量を幾度とも無く味わう。銃の反動で肩に痣が出来るたうえで更に撃つ。銃の重さを支えるのと、テッパチ（８８式鉄帽、ヘルメット）の重量に耐えるために筋肉痛で明日は死んでいるだろう。
今からするのはそんなことだ。１人辺りノルマは１０００発。下手すれば、自衛官が撃てる弾数を今日だけで撃ち切るのだ。
素晴らしい。
それが、もう数分後まで迫っている。他の人間は今は最後の休憩。
射撃場の外でタバコやトイレといったところだ。
そして、自分はというと銃の最終調整だ。
相棒の６４式（６４式７．６２ｍｍ小銃）に耐熱のビニールテープを張った後、私物のスコープマウント（スコープなどを取り付ける

ための金具）を取り付ける。何故かは知らないが、６４式にスコープマウントを取り付ける際はテープか紙を緩衝材として着けないと照準が狂うのだ。
がたつきが無いのを確認後にスコープマウントに私物のダットサイト（銃の照準を容易にするための器具。レンズを覗き込めばレーザーで映し出された光点が出るのでそこを狙って撃つ）のＭＤ－３３（サイトロンジャパン製の実銃用ダットサイト、価格の割りに非常に高性能。市販されている）を取り付けた上で、私物のチークパッド（銃にスコープやダットサイトをつけた際にレンズを覗き込むのを容易にする器具）を取り付ける。
それで終わりではない。ダットサイトの調整がある。
よくＦＰＳ等のゲームでスコープ等のアイテムを手に入れて、銃に装着して正確に射撃していたりする。だが、現実の射撃はそんなに甘くない。
詳しい説明は省くが、銃に合わせてやる必要がある。
今は実際に撃つわけにいかないので、簡易的に調整するしかない。
銃に弾丸型のレーザーポインターを装てんする。これで、銃口から銃身と同じ向きにレーザーが照射される。厳密に言うと異なるが、弾を撃ったらどう飛ぶか簡易的にわかるわけだ。
ダットサイトの光点とレーザーポインターの光点を合わせれば大体照準が合う。
大体というのは、銃口から発射された弾丸は重力に導かれて徐々に山形の弾道をかくのと、銃身に刻まれた溝であるライフリングの向きに左右されて若干弾道が逸れるのと、銃口とダットサイトの位置の違い、個人の癖、銃自体の個体差等で弾道が逸れる。
ここは屋内で２００ｍなので心配する必要は無いのだが、風向きも重大な要因だ。
個人的に、射撃はスキルでありアートだと思っている。
それは、人と銃の対話であり、相互理解の結果である。駄目な銃も確かにいる。だが、大体駄目なのは撃つ人間側が原因だ。

反動を怖がっていないか？ブラストや銃声にびくつくな！引き金を真っ直ぐ後ろに引いているか？引き金を勢いよく引きすぎて右に引っ張られてないか？呼吸を落ち着かせろ、酸素不足は視力が落ちる。両目をしっかり開けろ、片目を閉じると視力が落ちる。口を半開きにしろ、頬を銃に当てるのがしっくり来る。エトセトラ・・・・。それらを無意識に行えるようになって初めてまともに撃てる。銃を撃つのは誰でも出来る。当てるのは難しい。

まあ、今日は気楽に弾を派手にばら撒くだけなので何も心配は要らない。そう思った瞬間だった。

射撃場の明かりが消えた。

周囲が真っ暗になる。

胸ポケットから取り出した携帯で周囲を照らしながら、無駄に頑丈なドアを開けて屋外に出る。

一瞬、眩しさに目がくらむ。

ドアを開けた先は・・・・・人が入ったことの無いような森が広がっていた。

何処だ、ここは。

道路は？同僚が休憩していた待機所は何処に消えた？電線が何故切れて垂れている？

声を出す。同僚の名を呼ぶ。呼び続ける。冗談だろう、冗談だといってくれ。返事は無い。

胸に沸き起こる焦燥感。

何かが起こっている。何が起こっているのかはわからないが。

調べなければならない。

だが、何を？

俺は途方にくれた。

ダブルテイク（前書き）

デフコン４（ダブルテイク）
準備態勢。
合衆国およびその同盟国を当事者とする紛争の発生を予想し、これに備える態勢

デフコン
Ｄｅｆｅｎｓｅ　Ｒｅａｄｉｎｅｓｓ　Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ　（防衛準備態勢）の略。
アメリカにおいて、国防総省が作成している戦争への軍の準備態勢を示す指針のこと。

１～５までの５段階に分けて設定されており、危機的状況に近いほど数字が小さくなる。

２２年１２月３日　装備品補足改定

ダブルテイク

最近の携帯は高性能だ。
あっという間に絶望させてくれた。
電波感度無し、ＧＰＳ感度無し、ラジオ感度無し、ワンセグ感度無し。
電子コンパスと気圧は計れた。念のため、遠距離射撃に必要な気圧だけは覚えておく。腕時計とも合致しているので、携帯は壊れていない。
この射撃場は市街地からかなり近い。それがどうしてこのような事になるのか・・・。パラージジャミング（電波妨害）位しか有り得ない。だが、不可能だ。このレベルの出力と電波帯域は容易に行えるものではない。
純粋に、電波発信源が消えたと考えたほうが良い。
つまり、非現実的ではあるのだが、ここは今までいたＹ県ではない。
下手すれば、日本、地球ではない。ＧＰＳが使えないのが一番それを表している。
状況をまとめてみる。
現在地不明、天候は良好、時刻も不明、心身ともに健康、食料は無し、水分は事故が起こった際の傷口洗浄用に水筒が幾つか、医療用具は少しある。
・・・・・・そして、武器弾薬は豊富。銃はＭＩＮＩＭＩ（５．５６ｍｍ機関銃ＭＩＮＩＭＩ）と、６４式（６４式７．６２ｍｍ小銃）と、９ｍｍ機関けん銃と、９ｍｍけん銃だが小隊を編成できる数がある。弾薬にいたっては合計１０万発は軽くある。
銃に装備するアクセサリーの類も官給品、私物を含めれば多種多様。小は薬きょう受け（薬きょうを回収するための袋）から、ＮＶＧ（ナイトビジョンゴーグル、暗視装置）の類が大量にある。電池が切れれば無用の長物になるのが大半だが。

個人装備も豊富だ。大半が私物だが米軍正式採用のプレートアーマー（セラミックのプレートを入っている防弾装備）からエルボー、ニーパッドやけん銃用レッグホルスター等、多岐に渡る。
私物がここまである理由は簡単だ。
今回、弾薬消費の作業員に志願したのが全員趣味が高じて入隊したか、いつの間にか趣味になった人間だったからだ。
当然、指揮官の幹部も趣味人。密かに全員に好きなアイテムを思う存分持って来いと事前に言われていた。その結果がこれだ。
そういえば、標的代わりに炭酸水のペットボトルとか、某国の独裁者の写真とか、不倫して別れた妻の写真や、頭部を模した風船や胴体を模した古着もあったのを思いだした。
ペットボトルは貴重な水分なので回収しておこう。
写真については・・・・着火剤位になるかもしれない。
風船と称して、コンドーム持ち込んだ馬鹿もいたがこの際逆にありがたい。耐久度が物凄いので簡易水筒に使える。余裕で水が2リットル入る。故意で穴を開けられてないかは神のみぞ知る。まあ、穴が開いていても銃の銃口カバーにはなる。
古着については、廃品（耐用年数、あるいは更新により不要になった官給品）の作業服が大半だ。物によってはまだ着れる。下着は無いが。
それと、銃の清掃用に各種油脂と工具、ウェス（布切れ）もある。銃の性能はこいつによる。これらが無くなった時が死ぬときだ。工具の中には折りたたみのナイフやマルチツールプライヤーもある。これらは非常に助かる。サバイバルの必須アイテムだ。
最後に住処になる屋内射撃場。風雨もしのげる上に、射撃中に地面敷くための毛布や、薬きょうを受ける網、折りたたみ椅子にテーブルもある。射撃場内は明かりが無いが、それ以外は絶好の条件といえる。
正直、恵まれている。衣食住の内、食以外は当面何とかできるのだ。サバイバルの基本の水分はかなりある。食料は銃で狩れば何とかな

るかもしれない。
生き残れる。
来るかどうかはわからないが救援が来るまで何とかなるかもしれない。希望が沸き起こる。
安心して地面にへたり込んだ。
だが、安堵のため息をつき目を開けた先には、木に刻まれた、まだ新しい４本の傷跡。高さは俺の身長よりかなり高い。
アラスカのグリズリークラスでもいるのだろうか、ここは。
銃があって本当に良かった。

リコネサンス（前書き）

リコネサンス（ｒｅｃｏｎｎａｉｓｓａｎｃｅ、偵察）
敵をはじめとして様々な事柄についての情報を目視観測などの手段
を通じて能動的に収集する活動。

リコネサンス

野生動物がいるというのは良くもあり、悪くもある。
自分にとって貴重な蛋白源であるということと、自分が相手にとって貴重な蛋白源になるということだ。
・・・・・・・まあ、この場所の生き物が蛋白質で構成されているのならばだが。
メインの食料は動物なのは確定である。正直、植物は何が食べれるかわからない。動物も毒を持つものが多いだろうが、多分植物よりはマシなはず・・・。いや、全く持って断言できないが。
その点、水も怖い。慣れるまでは、生水は怖くて飲めない。一度沸かして飲むべきだろう。
幸か不幸か、水筒は旧型のアルミだ。・・・・・・信じられるか？この水筒、俺より年上なんだぜ？
正直あまりやりたい方法ではないが、水筒で湯沸しするしかなさそうだ。飯ごうも食器も何も無いのだ。少なくとも箸は作りたいのだが、毒性のある木で無ければいいのだが・・・・。
と、唐突に気がつく。
食器も箸も、パーツ皿や銃身洗浄用のクリーニングロッドで何とか代用できるのだ。
その他、際限なく色々な思考が浮かんでは消え浮かんでは消える。問題点の列挙と解決策の模索で脳がパンク寸前だった。
こんな時は体を動かすに限る。
周囲の偵察に向かうことにする。

目的は水源地の確保、食料の確保、地理の把握だ。優先順位もその順番だ。
水が無ければ3日程しか元気に活動できない。食料はもう少し無くても持つ。地理は生きていればそのうち覚える。最初のうちは１０

歩ごとに止まり周囲の音を聞きながら、方位磁石を確認して正確に航法を行えば何とか射撃場に帰ってこれるはずだ。
周囲の偵察方法はクローバーリーフパターン。対潜哨戒機が潜水艦を捜索したり、魚雷やミサイルが目標をロストした際に行われる捜索方法だ。
射撃場を中心に四葉のクローバーの葉っぱのような感じで北に３０分歩いては折り返し、今度は南に歩き射撃場に戻って更に南から北、東から西といった感じで全方位歩くことにする。休憩を入れても明るいうちに調べられるだろう。

武器は、６４式小銃とレッグホルスターに入れた９ｍｍけん銃。
予備弾倉はそれぞれ６本１２０発と、４本３６発。念のためにリュックの中には紙箱に入ったままの予備弾も入れておく。
それと、誰が持ち込んだかはわからないが、６４式の銃剣もあった。研がれていないので突き刺す位にしか使えないのだが念のために左腰に吊るしておく。
服装はショップ帽（識別帽、職場が人目で見分けられるようにそれぞれの部隊が独自に作っているキャップ）に、作業服（緑色の作業時等に着る服）に編上靴、皮手袋。
腰の弾帯（幅広のベルト。色々な物が吊るせる様になっている）には弾納（６４式小銃弾倉用のマガジンポーチ）と、レッグホルスターや銃剣、水筒、マルチツールプライヤーを吊るす。
リュックの中には、予備弾、雨具、ビニール袋、メモ帳、筆記具、コンドーム、予備の水筒、フラッシュライト、ナイトビジョンゴーグル、予備の電池、パラシュートロープ、銃のクリーニングキット、食器代わりの代物、黒のビニールテープ、ライター等が入っている。色々と不安が残る。食料が無いのがこんなに心細いとは・・・。水も十分ではない。
ともあれ、出発の準備は大体整った。
最後に銃の準備だ。

６４式の脱落しそうな部品には黒のビニールテープを巻いていく。
握把（あくは、グリップ）等、は念のためにドライバーで増し締めする。規正子（きせいし、気温や弾の種類に合わせて調整する部品）は中に合わせる。
薬室に弾が入っていないのを確認後、銃口を覗き込んで銃身内も確認する。薬室側を太陽に向けるとクロームメッキに覆われた塵一つ無い銃身内部が見えた。４条右転のライフリングが美しい。安全装置を解除し空撃ちする。
単射機構、連射機構の動作チェックのために空撃ちを繰り返す。遊底（ゆうてい、ボルト）の滑らかな動きに満足する。
弾倉を装着し初弾を装填、安全装置をア、安全の位置へ。ダットサイトのＭＤ－３３のスイッチはオートモードに。周囲の光量に合わせてくれる上に、このモードなら４０日間連続点灯できる。
続いて、９ｍｍけん銃。薬室に弾が無いかを確認し、銃身内部を点検後に同じく作動チェック。弾倉を装着後、脱落防止にテープを張る。こちらも初弾を装填するが、デコッキングレバーでハンマーを戻す。あせって暴発させないようにするためだ。
ホルスターに入れては構えを何度か試す。引っかかりは何も無い。
落ち着いて行動すれば大丈夫そうだ。
さあ、準備は整った。
偵察に出かけよう。
生き残るために。

リコネサンス（後書き）

我ながら書いてて地味すぎる。

An army marches on its stomach（前書き）

「軍隊は胃袋で動く」とはナポレオンの至言

２２年１２月０８日、誤字修正。誤字の原因は飲酒。駄目人間ですみません。生きていてすみません。

An army marches on its stomach

念のため、射撃場の屋上に上って周囲の状態を見ておいた。特に今回は低地の方角が一番の重要事項。
で、観察の結果わかったのは、周囲に人工物は一切無い。煙すらも無かった。
視界内には湖のようなものも無し。ポツリポツリと小山があるが、高度５００m以上らしき山は無し。高低差はあれど平地だ。それと、射撃場も少し高度が高い。
射撃場の屋上から撃つ場合は、その高度差を考えないと標的に当たらない。
高度差がある射撃は少し計算がいるのだ。
射撃場の周囲は森に囲まれているが、視界内には草原等も多く見かけられた。
動物も多い。草食動物の群れらしきものが草原をのんびりと歩いているのを何度も見かけた。双眼鏡で確認した限りでは角が生えていない鹿のようだった。色彩が少しおかしかったが。周囲に合わせたのか微妙に緑と黒の迷彩だった。正直、食欲がわかないが、あれなら一匹で数日は余裕で食いつなげるだろう。
鹿肉を食べるのは初めてだ。串焼きはさぞ美味しいだろう。燻製を作ってもいいし、皮は天然の迷彩効果を発揮しそうだ。
・・・・・問題は、安全に食べれるかどうかだが。毒を持っていたら洒落にならない。唯一の安心材料は、警告するような派手な色彩を持っていないことだ。毒を持っている生き物は毒を使う以前に、警告するような派手な色彩で威嚇している場合が多い。あの鹿モドキは迷彩なので、そうでない可能性がある。
まあ、発見できたのは全て６４式の有効射程範囲外だったので今回は撃たなかった。スコープなら十分狙えたが、ダットサイトでは難しい。当てれることは当てれるが、致命的な部位に当てれそうも無

かったのだ。
手持ちの弾薬は全て軍用の弾薬だ。狩猟用のものではない。人間相手には有効だが、野生動物に対しては不明だ。
人間に比べて野生動物の生命力は尋常に無い。
致命的部位に当たらなかった鹿を1昼夜追いかけてようやく捕捉できた等の話はいくらでも聞く。それに、致命的部位は大体が毛、皮膚、脂肪、筋肉と天然のボディーアーマーで守られている。熊などは頭骨でけん銃弾くらいは弾いたりする。
色々と考えて、野生動物を狩る際は、習性や生態をよく調べてから行おうと思う。
草食動物だと思って狩ったら、肉食動物で狩る側から狩られる側になるなんて事になったら笑えない。
考えることが多くて、つい脱線してしまう。
目的は低地を探すことだった。
一番それらしい方角は西、高度が低くなっているのと、森の中に一部ぽっかりと開けて植生が変わっている空間が出来ている。双眼鏡をのぞくと反射した。小さいながら湖がある。距離は概算で４ｋｍ。下流には距離があるが、大きな湖がある。概算１２ｋｍ。魚もいるかもしれない。薬きょう回収用の網で投網も出来るかもしれない。
湖から直接水を汲むのは、あまりよろしくないがそれより上流の小川なら直接飲んでも問題ない位に清潔な水が手に入る可能性がある。
湖まで到達するのに目標になるような地形地物を探す。あった。岩山がある。この方角には他に岩山は無い。あの方向に歩いていれば湖に到達する。その他にも細々した特長的な地形を記憶していく。
クローバーリーフパターンで捜索は明日だ。
今日は水の確保と湖の状況確認が最優先だ。

そして、喜び勇んで出発してから暫く、前人未到の森を舐めていたのを後悔した俺がいた。
歩きなれていない道なき道もそうだが、敵はまだまだいた。

一歩間違えれば遭難する。水はともかく食料の調達がめどが立たない。そして、一番の問題は、生き残れるのか、生き残っても意味はあるのか。地味に精神的なプレッシャーがキツイ。
そして、歩き始めて３０分後、方位を確認しようと立ち止まった際に微妙な物音が聞こえた。
少し高めで、耳慣れぬ小さな音。持続的に聞こえる。肩からつるした６４式を手にとり安全装置を解除する。
・・・・・・・・・いた。
正面、３ｍの位置に蛇がいる。威嚇しているようだ。
危ないところだった。そのまま進んでいたら噛まれていただろう。
毒を持ってる種類だったら、血清も無い今の状態だったら死んでいるだろう。
また、敵が増えた。
それからは、枯れ木で地面を探りつつ音を立てて進んでいく。本来臆病な生き物の蛇に自分から逃げてもらおうというわけだ。
また、蛇がいるのは地面だけじゃない。木の上にもいるかもしれない。常に周囲に目を向けなければならない。当然、歩く速度は落ちる。
だが、それが返って良かったかもしれない。
周囲を観察する余裕が出来た。
そして、それを見つけた。
ブドウのような果物だ。ブドウのように実っているが、色は鮮やかな赤。蟻のような虫が実にまとわり付いている。こいつの名前はブドウにしておこう。
観察を続ける。
実に鳥のついばんだ様な跡もある。地面を見ると鳥の糞もある・・・。周囲に鳥等の死骸は無い。
また、このブドウの木みたいな代物は周囲に群生しているらしかった。
・・・・・・・金の鉱脈を見つけたかもしれない。

ただ、油断は禁物だ。
手袋を外し、ブドウの実を一つ手に取る。瑞々しくて美味そうだ。
ほんの少し指先に力を込め、果汁を絞り手の甲に一滴落とし暫く待つ。
赤い綺麗な果汁を水筒の水で洗い流し、皮膚の状態を入念に確認する。異常なし。
続いて、果汁を舌先に少しつける。
舌は繊細な感覚器官だ。異常があれば一瞬で感知する。少量の苦味、渋味ですら感知でき、毒の種類によっては一瞬で痺れたり、痛みを覚える。
・・・・・・・・・異常なし。唯一気になるのは異常なほどの甘みだ。正直、尋常に無く美味い。空腹だからなおさらだ。
そして聊か緊張しながら、実自体を口に含む。
口内の粘膜も一切異常を感知しない。
・・・・・・・・・そして、美味い。水分を大量に含みつつ、この糖度は素晴らしい。明日一切身体に異常が無ければ、このブドウは主食の一つになるだろう。
余裕が出来たら、酒つくりに挑戦しても良い。夢が広がる。
ただし、まだ油断は出来ない。3個ほど食べるが、それ以上は食べない。これ以降は消化と吸収が終っても身体に異常が出なかったとわかってからだ。
最低でも、8時間は様子を見たい。
名残惜しいが、湖から帰り道に採って夕食にいただこう。
果糖のおかげだろうか、心理的なものだろうか。急に元気がわいてくる。
何より、酒が造れる可能性が出てきたのはデカイ。あの糖度なら良い線いけるのではないのだろうか。最初は失敗の連続だろう。試行錯誤で徐々にワインモドキに、次はブランデーモドキだ。
焚き火で焼いた肉とブランデーモドキはさぞ合うだろう。野趣あふれる天然素材の集まりだ。燻製も良い。湖で魚が獲れるなら、そい

つの燻製も合いそうだ。人生楽しまなければ損だ。どうせ明日も知れない人生だ。明るく楽しく生きてやる。
そうそう、サバイバルの基本で、生き残るのには「心の強さ」「知識」「道具」の順番で重要だそうだ。
・・・・・・・色々と食い意地が張っていて、新しい食材に目が無い俺は意外に適任かもしれない。
「美味い奴に会いに行く」
それが俺のモットーだ。
それは、色々と環境が変わったこの地でも変わらない。
「生き残る」
それは大前提でもう一つ付け加えよう。
「生きる楽しみを味わおう」
人はパンだけで生きるのではないと言った人間も過去にはいた。
生きて、何も考えずに飢えを満たすだけの人生は止めようというやつだったか？忘れたが。
だが、現状は食にも命がけの状態だ。
美味さよりも、エネルギーや栄養が優先する。
それでも、楽しみは必要だ。美味しいものが食べたい。
どうせ明日も知れない人生だ。張り詰めてても仕方が無い。精々、鼓動が止まる瞬間までは楽しく生きてやろう。
そう思って周囲を改めてみる。
木陰から差し込む日の光がきれいだった。空気が美味しい。人の手が入っていない木々も見事な造形美だ。何処からとも無く聞こえる楽しげな鳥の声を聞くと嬉しくなる。世界はこんなにも情報に満ち溢れてて、美しかったとは・・・・。
楽しまなければ損だ。一秒でも長く生きれば、それだけ楽しめる。
さあ、歩こう、生きる為に、楽しむ為に。

デビルドッグ（前書き）

ＷＷ２時に敵であるドイツ軍により米海兵隊が名づけられたニックネーム。

デビルドッグ

無事に湖の湖畔に辿り着いたのだが・・・・色々と限界だった。
小便がしたい。
いや、今までもやろうと思えばいつでも出来たのだが、ついここまで来てしまった。
頭上に木があったので、あまりしたくなかったのだ。アンモニア臭に反応して、木からダニやヒルの類がアイキャンフライしてきたら厄介だったからだ。噛まれたら化膿して病気になる可能性がある。
かといって、湖に放水するのもどうかと思う。煮沸して飲むとは言え湖の水はメインの飲料水になる可能性がある。本当に追い詰められたらどんな意地汚い方法でも生き延びるが、今はこれくらい小さいことでもこだわって生きて行きたい。無駄を楽しむことが人生の醍醐味だろう？
まあ、それはともかく湖から少し離れた場所で放水を開始する。
ああ、素晴らしき開放感と思った瞬間、着弾（？）地点付近から蛇が這い出てくる。
・・・・・・怒ってる。気持ちはわからんでもないが落ち着け。
いや、落ち着いてください。
放水しつつ後ずさりする。開放感などもう無い。
それから十秒位、蛇の追跡から必死に逃げた。人生で最も長い時間だった。精神衛生によろしくない。
些細なことでも命取りになるサバイバル生活は実に過酷だ。

気を取り直し、湖に戻ってきた。
湖畔の岩に腰掛・・・・・もちろん蛇がいないか調べた後でだが、銃とリュックを下ろす。合計１５ｋｇの重荷が無くなると、羽が生えたように身体が軽くなったような錯覚を覚える。
小休止をとりつつ湖の周囲を観察する。

湖の大きさは３００ｍ四方程度、さほど大きくない。湖の周囲は丈の短い草が多めだ。増水時ここまで水が来るかもしれない。
水は綺麗だ。川の一部が広がって流れが緩やかになっているだけで、実際は湖ではないらしい。大き目の川魚はいないが小魚や小エビの類がいる。
水温は冷たい。暑い日に泳いだらさぞ気持ちがいいだろう。狩して得た獲物の温度を下げるのにも役に立ちそうだ。
６４式のみ背負い、荷物を置いたまま湖畔の周辺を少し散歩する。砂地になっている場所は素晴らしいことを教えてくれた。この湖は様々な生き物の水場になっているようだ。
鳥、小型と大型の４つ足の動物の足跡がある。一部の足跡は何度も同じ場所を通っている。巡回ルートがあるようだ。
風下で隠れていれば狩ることが出来るだろう。ただ、どの時刻に水を飲みに来るかは調べないといけない。比較的楽に調べれる。射撃場の屋上でずっと監視していればいいだけだ。それで調べて場所を特定したらルートに罠を仕掛けても良いし、偽装した掩蔽豪を作って潜んでいても良い。
最後に、この湖の上流と下流を調べる。
上流も下流も残念ながら射撃場から離れる方角に向かっていた。この湖が一番近いらしい。
ただ、飲料水を入手するなら湖より上流側のほうが良いので、今回からそこで汲むことにする。湖自体が生物が生きているくらいに綺麗なのだ。ただ、さらに上流で自然死、或いは病死した生き物がいたり寄生虫を持った生き物が排泄行為を行っている可能性はゼロではない。煮沸すれば間違いなく、それらも問題無くなる。手間隙を惜しんで死んでしまっては意味が無い。
この湖は素晴らしい。水分の調達、蛋白質の調達はここで賄えそうだ。あとは、動物から摂取できなさそうな必須栄養素の類は、植物から賄う必要があるが食事にレパートリーが欲しいので色々と試してみるつもりだ。

その他にも、風呂は流石に難しいが水浴びや洗濯もできるだろう。植物を焼いて出来た灰か何かを洗剤に使っていたと聞く。色々と試行錯誤してみるのも面白いだろう。
さて、湖の偵察は大体終った。後は荷物を回収してＲＴＢ（Ｒｅｔｕｒｎ　Ｔｏ　Ｂａｓｅ　基地への帰還を意味）だ。

だが、荷物の場所に戻ると、体長４ｍに達するような巨大な黒い犬みたいな生き物が荷物を嗅ぎ回っていた。荷物も重要だが、命のほうがもっと重要だ。最悪、荷物を放棄するつもりで、物音を立てないようにゆっくり後ずさりする。前側の足に体重をかけて、後ろ側の足で地面の状態を把握後に後ろに体重を移行するといったやり方だ。それとすっかり忘れていた。６４式の安全装置を解除しレ・・・連射に合わせる。腰だめに構えていつでも発砲できるようにする。５０ｍは離れただろうか、荷物を小突き回すのに飽きたのか、あるいは俺の匂いで気が付いたのか巨大な犬はこちらに視線を送ってきた。動作を全て止める。石のように動かない。
生き物の中には動いている物には敏感だが、動いていない物は一切視界に入らないものがいる。中には色の識別が出来ないものがいるほどだ。
だが、巨大な犬は違うようだ。こちらを認識して近づいて来る。
普通、野生動物は慎重なはずだ。
人間みたいな2足歩行の一見大柄に見える生物には注意を払うか、逃げる。
好奇心が強い生き物でも、すぐには近づいてこない。
それでも近づくならば？餌として認識されているのだろうか？
これ以上近づかれるわけにはいかない。逃げても逆に興奮して追ってくる。追われたら最後、人間の足では一瞬で追いつかれて終わりだ。怯えを見せるわけにはいかない、威嚇で撃つことにする。
腰だめのまま、犬の至近を通過するように指きりで一発だけ撃つことにする。６４式は連射速度が低めに抑えられている、連射でもコ

ントロールが容易だ。
右手の人差し指を一瞬だけ動かす。６４式が轟音をたて手の中で跳ねる。
銃声と弾が至近を通過した衝撃波音に犬は動きを止める。
こちらは左足を前に、右足を後ろに重心を下へ、左手は上部被筒（じょうぶひとう、ハンドガード上部）を上から押さえて反動に備える。右手はいつでも引き金を引ける。戦う準備は万端だ。
犬とにらみ合いが続く。周囲は静寂に包まれていたのか、ただ単に聞こえなかったのか・・・・。
犬が動いた。早い、向かってくる。
それに対して６４式を放つ。アドレナリンの影響だろうか、反動はおろか銃声も聞こえない。
ただ、犬の胸部を中心に着弾するように６４式をコントロールする。
数発撃っては引き金から人差し指を離して、また撃つ。
時間の経過がわからない。
６４式の弾が切れた。引き金を引いても弾が出ないので気が付く。
犬は目の前に迫っていた。もう、無理だ。犬の自身の血にぬれて真っ赤な口、強大な犬歯に切り裂かれて終わりだろう。
だが、訓練の影響か生存本能だろうか、弾が切れたと思った瞬間に６４式から手を離し・・・右手は下へ、左手は心臓の位置へと動いた。
右手が右腰を経由して目的の位置へ、親指がレッグホルスターのロックを解除し、人差し指を除く全指でソレを掴む。右手はそれを引き上げながら徐々に胸の前まで近づく。この段階で安全のために心臓の位置で待機させていた左手も動き出し、右手とソレにランデブーするために動いた。
ソレの名は９ｍｍけん銃。・・・・身体は極度の緊張、興奮状態でも動いてくれた。気が付けば両手に包み込むように、目の前に拳銃を構えていた。
胸部ではライフル弾でも効果なかった。では、もっと非力なけん銃

弾で効果が発揮できそうなのはどこか・・・・。
目を狙って撃つ。
逸れた。額の頭骨で弾かれる。反動で跳ね上げられそうな腕を無理やり押さえつける。次の弾も外れた、頬の肉を抉るに留まる。
だが、もう犬は目の前だ。外すのが難しい。ようやく、目に当てる。目に当たった弾は脳に多少なりともダメージを与えたようだ。
足に力が入らなくなったのか、犬は姿勢を崩す。
だが、勢いは急には殺せない。減速したとはいえ、かなりの速度で犬が突っ込んでくる。
足に力を込め、懸命に回避しようと横に飛ぶ。
避けきれない。右足に衝撃。痛みは感じなかった。
右足の衝撃で身動きがとれず、背中から地面に落ちる。３点式スリングで首から吊っていた６４式が胸の上に落ちてきた。５ｋｇ近い重さだ。
肺が苦しい。咳き込みたいのを我慢して、吐き気を無視して起き上がる。
９ｍｍけん銃はどこかに吹飛ばされていた。
犬から注意を逸らさずに６４式の弾倉を交換して、弾を装填する。
続いて、６４式に銃剣を着剣する。安全装置も連射から単射に切り替える。
銃口を向けたまま慎重に犬に接近する。
右足が痛む。思うように歩けない。それでも、着実に犬に近づいていった。
驚いたことにまだ、生きていた。呼吸のために胸が上下していた。
だが、胸部からは血に混じった泡が出ている。肺に傷がついているのだ。長くは持たない。
もう見えているかも怪しいが、犬は視線をこちらに向けてきた。
その目は痛みからだろうか、涙を流していた。俺の潰した右目は血が混じった赤い涙だ。
致命傷だ。もう、助けることはできない。だが、俺にも出来る唯一

のことがある。
Ｃｏｕｐ　ｄｅ　ｇｒ？ｃｅ（クー・ド・グラース　フランス語。慈悲の一撃）、痛みからの永遠の解放だ。
後頭部に向けて６４式を構える。ダットサイトの光点は遠距離用に設定している。少しそれを考えてから照準しなおす。
右手の人差し指をゆっくりと絞る。
銃声とともに肩に反動がきた。
・・・・・・・・・・・・・・・ようやく戦っている際には聞こえなかった銃声が聞こえた。
耳鳴りが止まらない。

バヨネット（前書き）

銃剣。、銃の先端部に装着して、槍のような戦い方ができるように工夫された武器のこと。

バヨネット

アドレナリンが燃えつき始めたようだ。
微妙な気だるさと眠気を感じる。
耳鳴りと、右足首の痛み、胸の痛みが急に気になった。
それでも、腰を落とすわけにはいかない。座り込んだら最後、寝てしまいそうだった。
６４式を構えなおす。
死者に鞭打つようだが、必要な行動だ。
倒れ伏した犬の首筋に銃剣を突きたてる。
皮膚の感触だろうか、かなりの抵抗をがあった。それが終ればバターを切り裂くように一切抵抗が無い。生きているならば、筋肉が銃剣に絡む。それは渾身の力をこめても引き抜けないほどだと聴いたことがある。
そんな時はどうすればいいか？銃で撃てばいい。反動と撃った銃弾で筋肉内に形成される瞬間空洞が容易に銃剣を引き抜かせてくれる上、止めもさせる。
ともあれ、犬は確実に絶命していることがわかった。
とりあえず、危機は去った。安堵のため息をつく。水筒から水を一口飲もうと、水筒に手にとりキャップを外そうとしてはじめて気が付く。手が小刻みにだが震えていた。
何だ、大層怯えてるじゃないか。それとも、アドレナリンの影響だろうか？ああ、トイレを済ませていて良かった。確実に漏らしてたな。そうそう、戦闘処女損失おめでとう。これで俺もチェリーボーイじゃなくなった。我らが倶楽部へようこそってやつだな。
人事のようにふと思う。戦場心理学の本を読んでいてよかったと思う。自分がどんな状況か理解できてコントロールできるのは有難い。
まあ、半ば現実逃避に近いが。
水を一口のみ、目を閉じて深呼吸をする。

早鐘のように早かった鼓動が落ち着いていくのが感じられる。
ＯＫ、いいぞ。なすべきことをしよう。
まずは荷物の回収だ。
少し離れた位置にあるリュックを拾うために歩く。
最初は少し違和感を覚えていた右足は、歩いているうちに少しうずくだけで痛みが引いていった。耳鳴りは相変わらずだが。この耳鳴りは後を引きそうだ。寝るまでには治って欲しいのだが。
リュックは犬に小突き回されて多少薄汚れていたものの、特になんとも無かった。食料等を入れていたらもう少し別の結果になっただろう。コーデュロナイロン製とはいえど、本気で歯をたてられたらかみ裂かれていた可能性が高い。
一応、中身も確認したが大丈夫だ。
そういえば、もう一つ重要なことを忘れていた。
けん銃が吹っ飛ばされた拍子に何処かにいっていた。
少し探すとすぐに見つかった。
砂地に落ちたので、少し砂にまみれている。油を塗布してある部分に砂が付着している。
まあ、念のためというか休憩がてら、銃の作動チェックと使用した弾を補充しておく。
１０分ほど座り込み、英気を養った。
続いて、本日一番の大仕事の前準備を行う。
湖に沈んでいる石を一つ一つ拾い集めていく。
探している石の種類は砂岩か泥岩。石英質を含んでいるものがいい。
丁度良さそうなのが幾つか見つかる。
石のきめの細かさと、表面の平らさを基準にそのうち幾つかを選ぶ。
程々目が細かく、微妙にきらきらと輝いて、表面が平らな砂岩を最初に試してみようと思う。
ちなみに、今からするのは６４式の銃剣の研ぎだ。
銃剣というのは、通常平時には刃が付いていない。
先端は尖っているので、突き刺す用途には使えるものの切ったりす

ることは出来ない。研がなければならないのだ。
更に条件が付く。
普通、銃剣の刃は柔らかい。ナイフや包丁等、切れ味や刃の持ちを優先する刃物と比べれば明らかに柔らかいのだ。
理由は簡単。求められている能力が普通の刃物と異なるからだ。
銃剣は文字通り、兵士にとって最後の武器だ。そして、多目的なツールでもある。切る以外にも必要に駆られれば使う可能性が高い。
例えば、塹壕堀り。手元にスコップが無い場合はどうするか？手で掘る？ナンセンスだ。そこらへんに落ちてる木の枝を使う？まあ、出来なくもない。だが、それが無い地域だったら？銃剣を地面に突きたて柔らかくした後に手で掘るしかない。
つまり、そのような事をする可能性があり、そのような事に耐えれるように作られているのが銃剣だ。折れる可能性があるので、硬さも重要だが粘り強さに重点が置かれる。なので、本来銃剣は刃物としては柔らかいのだ。本来は。
で、その本来の銃剣とは異なるものが手元にある。６４式の銃剣だ。こいつは、日本人特有の凝り性というか、ナイフほどではないがそれなりに固い鋼材で作られている。普通に刃物として使える。
さて、そのような銃剣を今から研ごうと思う。
砥石として選んだ砂岩を地面に置く。湖に沈んでいたので内部までしっかりと水がしみこんでいる。これが重要。研ぎの基本だ。
よく、水道の蛇口の真下に砥石を置いて水を小刻みに出しながら研ぐ人がいる。
あれは間違いだ。
数時間砥石を水中に沈め、水分をよく含ませた後、水分をほとんど足さずに研いだほうが良いと聞いた。水分はあくまで潤滑と冷却の意味でしかない。研いでいると摩擦熱で刃が鈍るのだ。それを防ぐのが、水気を含んだ砥石。更にもう一つ言おう。実は研いでいる際には砥石の表面で研いでいるわけではないらしい。重要なのは、研いでる際に出る研ぎ汁らしい。それをわかった上で、砥石の表面を

削り平面を作れば、研ぎの半分が終ったといえるらしい。まあ、俺はそこまで辿り着けないが。
ともあれ、今は銃剣を応急的に研ぐことにしよう。
当座は刃が付けばいい。
だが、意外に難しい。一定の角度で規則正しく前後するだけの作業なのだが、ゆえに難しい。
今まで研いできたのがナイフや包丁のような比較的薄刃の刃物が多かったのだ。
銃剣のような少し厚めで角度が異なる刃を持った刃物はしたことが無い。
おまけに砥石は平面と言いがたい状態。一応、周辺の石で擦り合わせて削り、平面が出るようにしたが、それでも不十分だ。満足とは言いがたい。
だが、それでも時を忘れて一心不乱に全力を振るった結果、満足できる一品が出来た。この銃剣は完璧だ。最後の仕上げで手のひらで撫ぜて刃についたバリを落とした後、試しに腕の産毛を剃ってみたが普通に剃れた。そして、先端は産毛も剃れるようなレベルだが、刃の根元は木の枝に食い込みやすいレベルに荒らしておいた。多目的に使えるようにだ。
時計を見ると2時間研いでいたらしい。我ながら集中しすぎである。
さて、ようやく大仕事に取り掛かれる。
と、思ったのだが・・・。
変な生き物に取り囲まれていた。
・・・・・・我ながら集中しすぎである。
さて、どうするべきだろう。
とりあえず、研いだばかりの銃剣を６４式に着剣する。安全装置は・・・・タ、単射だ。
・・・・・・・・・・本当にどうしようか。

ワンショットワンキル（前書き）

その名の通り、ワンショット（一発の発射）でワンキル（一人倒す）する技術。又はその動作。
出来るだけ弾の消費が少なく、多くの人数を撃破できる。
特に、遠距離から単発を撃ち込むスナイパーにとっては欠かせない技術である。

ワンショットワンキル

最初に行ったのは優先的に倒すべき目標の選定だ。
優先は指揮官。続いて脅威になりそうな装備を持っている対象。
指揮官は中央にいる身なりがいいのだろう、多分。
脅威になりそうなのは短槍を持っている6体。あれは投擲に使える。
射程は恐らく40m。
斧を持っているのも気になる。あれも一応投擲できる。それ以外は近接しなければ問題ない。
因みに、目の前にいる生物たちは犬の頭を持った二足歩行の生き物だ。こいつらの事は『犬頭』と呼ぶことにする。やや猫背気味、距離も200m程離れているので正確な身長はわからないが、おおむね人間と同じくらいの背丈だろう。よく見れば小柄な犬頭が何体かいる。子供だろうか？こちらに近づいてこようとしているのを回りに必死に止められているのを見て、何となくだが緊張感をそがれる。
「キュー！キュー！」「キー！キー！」「クー！クー！」
威嚇なのか鳴き声が聞こえる。槍や斧を手にして振っている様は、犬の顔のおかげで逆に可愛く思える。表情はまあ、距離が離れているので良くわからないが。
犬の前足みたいな手で器用に武器や道具を持っているのも可愛らしい。
まあそんなことを思いつつも観察を続けて、身体的特徴から照準するべきは人間と同じスナイパートライアングル（首と両乳首を結んだ三角形。人間ならば致命的部位）にする。自前の毛皮の上にポンチョのように別の毛皮を羽織っているがボディーアーマー的なものを実につけている様子はない。心臓か肺に傷をつければ短時間で継戦能力を奪えるだろう。
状況を考える。
背後は湖。逃げ場はまあ無い。投擲武器が無くなっても投石される

だけで十分脅威だ。湖を泳いで渡るのはあまり選択したくない。
距離は概ね２００ｍ。それ以上近寄ってこない理由は不明だ。だが、あの位置に陣取られていては身動きが取れない。
つまり、正面から切り抜けるしかない。
一番気をつけるのは投擲武器。遮蔽物が欲しい。今さっきの犬の死骸がある。これで代用できる。格闘戦になった時は・・・・まあ諦めよう。ランチェスターの方程式的に無理だ。ざっと見ただけで３０体はいる。
さて、そこまで一瞬で判断して戦闘体勢を整える。
ダットサイトの照準を２００ｍの位置に合わせる。ダイヤルの小気味良いクリック感が何とも小気味良い。
現在、６４式には２１発弾が込められている。１体１発で足りたとしても足りない。明らかに足りない。なので、予備弾倉を取り出す。弾が切れた瞬間に一瞬で交換して再装填するためだ。この状態ならば、けん銃を取り出して射撃するよりも早く６４式で射撃できる。コンバットリロードというのだが、これなら7秒ほどで再射撃できそうだ。人によってはこれは遅いというだろう。7秒というのは長い。銃撃戦ならば特に。だが、６４式の構造上それくらい再装填に時間がかかる。まあ、俺のやり慣れていないのもある。そもそも、６４式でコンバットリロード自体が始めてやる。撃ち終わってから空になった弾倉を放り捨てながら再装填するというコンバットリロードという方法は物品愛護と安全基準にうるさい自衛隊には馴染みが浅い。
そして最後に、拾っておいたけん銃の空薬きょうを耳栓代わりに耳に突っ込む。
これ以上、耳鳴りが悪化してはたまらない。
まあ、そんなことを考えてる間に身体は勝手に動いて、犬の死骸に遮蔽物に使えるように近づき、しゃがみ、射撃姿勢をとる。
あとはまあ、優先順位に基づき無力化。投擲武器を持っている対象を無力化したら、英雄的行動をとろうとする対象を無力化して意欲

をくじく。願うならば、そうなる前に逃げてくれればありがたい。
弾の無駄だし大量殺戮はしたくない。
だが、そんな思いも全て打ち砕いてくれるようなことが起こる。
つい今さっき戦った巨大な犬みたいな生き物が木々をかき分けて現れる。
犬頭達は背後にいる巨体に気が付いていない。
だが、巨大な犬が一声吼えるとようやく気が付いた。
犬頭達は一瞬でパニックになった。一斉に逃げ出そうとする。指揮官が落ち着くように喚くが効果はない。ふむ、犬と犬頭の仲はあまり良くないようだ。
その証拠に犬が一声無くと腰を抜かしたように身動きが取れなくなった犬頭が何体もいた。その中の何体かは子供だと思った小柄な犬頭だ。
その結果を見て満足そうに小柄の犬頭に近づく犬。
だが、その歩みが止まる。
犬はこちらを向いた。
・・・・・・。ようやく、同属の死骸に気が付いたか。
それを見てから優先順位を変更する。
犬のあの突進力と速度は脅威だ。別に、犬頭を助けようなどと思ったわけではない。まあ、そういうことにしよう。
精密に照準できるように犬の死骸から離れ地面に伏せながら、６４式備え付けの２脚を立てる。うつ伏せで寝転がりながら、右手は６４式のグリップを、左手はストックの根元を掴む。両足は適度に開き、チークパッドに頬を当て口は半開き。射撃姿勢完了。
それらを終えると深呼吸。８割吸ったところで呼吸を止める。
既に照準は犬の頭。右目の位置にダットサイトの光点は合わさっている。
右手の人差し指は既にトリガーにかかっている。ゆっくりと確実に引き絞る。
撃った。

肩に蹴飛ばされたような反動。土煙。芳しき硝煙の香り。
ダットサイトの越しに見える犬の頭付近でピンク色の煙が見えた。
犬の四肢が力を失ってがくりと崩れ落ちる。
そのまま監視を続ける。ピクリとも動かない。
さて、もう一方の犬頭はというと・・・・。
木々の合間からおっかなびっくり覗いている。
犬が死んだのをようやく認めたのか恐々木々の合間から出てきた。
腰を抜かした犬頭に手を貸したり、小柄な犬頭も親らしき犬頭と抱き合って生を喜ぶ姿はどう見ても人間のそれと変わらなかった。それを見て頬が緩むのを感じる。ちょっとした自己満足。やはり、人型に近い生き物とは戦いたくない。
荷物を拾い、注意がそがれている間に逃げようと思う。
耳から耳栓代わりの空薬きょうを抜く。
犬の死骸をちらりと見る。せっかく銃剣も研いで、貴重な蛋白源を手に入れることが出来ると思ったが仕方がない。今日は木の実でささやかな晩餐だ。
さて、では転進と思ったらまたもや囲まれていた。
ただし、今度は態度が全く異なっている。威嚇とかは無かった。
犬頭はほぼ全員無言で見つめいていた。
ただ、一匹だけ違った。
駆け寄ってくる。
結果的に今さっき助けた小柄な犬頭だ。武器等は持ってない。
尻尾を振り回し、こちらに飛び出してくる。危険は感じない。
危ないので念のために６４式から銃剣は取り外して鞘に戻しておく。
６４式にも安全装置を掛けておいた。そのまま肩から吊るし背中に回す。
ただし、念のためにけん銃のホルスターのロックは外してすぐに引き抜けるようにしておく。
近寄ってくる犬頭は、身長６０ｃｍ程度で大きめの犬の頭に茶色の短毛、耳は頭頂に２つ立っている。手には肉球付きの４指。足は人

間と関節の構造が異なるようで歩き方が異なっていた。
ポンチョのように毛皮をまとい、装飾品は皮ひもで作ったと思わしき首飾り。
そんな犬頭が飛びついてきた。
俺をその小柄な身体で抱きしめてくる。身長が圧倒的に足りないので足までしか届いてない。
左手の手袋を外す。
耳を避けるように頭を撫でる。
・・・・・・・・・・・・・・・癖になりそうなほど素晴らしい感触だ。
それをくすぐったそうに気持ち良さそうにしてる犬頭は実に愛らしい。
願わくば、彼らと友好的な立場になりたいものだ。少なくとも戦いたくはない。
そう思い、撫で続けた。

コンバットストレスリアクション（前書き）

戦闘ストレス反応。戦闘によってもたらされる心理的な反応。

コンバットストレスリアクション

抱きついてきた犬頭はこちらの様子を伺うように見上げてくる。
本来、犬よりも猫派だと思っていたのだが、これにはやられた。
足に抱きついたままそのつぶらな瞳で見つめながら小首を傾げる素振りは致死レベルだった。
ただ・・・・・問題は犬頭が何を伝えようとしているかだ。
声帯の形状が違うらしく、犬猫が鳴いているようにしか聞こえない。
全く持って意図が伝わらない。
そう思ったら、犬の死骸の前までぐいぐい引っ張ってつれてこられた。
・・・・・・・うすうすと想像がついた。
子供の犬頭の外見を観察するに、痩せているように思えた。満足に食事を取っていないのかもしれない。
つまり、この巨大な犬の死骸を食べたいらしい。
共食いじゃなかろうかと思う。いやまあ、顔が似ているだけで全く別種の生き物だとは思うのだが。
ともあれ、まとわりつく犬頭をやさしく引き剥がしい犬の死骸に向かってそっと一押ししてやる。
犬頭は戸惑った。怖いのかもしれない。それはそうだ。自分の何倍もの巨体を目の前にすれば怖い。それも今さっき襲い掛かってきたのと同種だとすれば。
だから、安心させるように一芝居うつ。
銃剣を抜いて、首筋に突きたてた。これでもう死んでいるのが解るはずだ。
その銃剣を引き抜き、犬頭に握らせる。
戸惑ったまま身動きが取れなくなるか、捌き始めるかと思ったのだが違った。
・・・・・・・・・・・犬頭は銃剣を何度も何度も犬の死骸に突き

立て始めた。
その様は鬼気迫るものがあった。思わず呆気にとられる。
小柄な犬頭には如何にも銃剣は大きすぎた。それでも、何度も何度も振りかぶっては下ろす。止めようと思った、だが止めれなかった。
何がこの犬頭を突き動かすのか？
食欲などでは断じて、ない。
本能に基づく行動にも思えない。
では・・・・・怒りか？
今さっき襲われた意趣返し？違う。
これはもっと根が深いものだ。
もう一頭の犬も同様に他の犬頭に嬲られていた。
それは、ひどく見慣れた光景だった。
ボスニア、チェチェン、アフガニスタン、ソマリア・・・・海外の報道番組には良くこれらの映像が流れていた。
有史以来、戦争時、紛争時、平時を問わず地球上で数限りなく行われていた行為。
その名は復讐、負の連鎖。
思わず、天を仰ぎ見る。
絶望感とも、無力感ともわからない感情が胸をつく。
止める事も出来なければ、権利もない。
だが、それでも・・・それがわかっていても限界だった。
疲労で動きが緩慢になった犬頭が銃剣を振りかぶった瞬間、後ろからそっとやさしく犬頭の手を両手で包み込む。
驚いた犬頭が振り向いた。
目に浮かんだ感情は読めない。虚ろだった。
返り血に濡れた銃剣を怪我をさせないように慎重に奪い取り鞘に戻す。そして、そっと抱きしめた。
犬頭は抵抗しなかった。
そのまま、どのくらい時間が経ったのだろうか。
手の中の犬頭は眠っていた。

その軽い体を起こさないように、そっと抱き上げる。
振り返ると、犬頭たちの半分くらいは犬の解体や火起こし、シェルターの作成等の野営の準備を行っているようだった。
残り半分はこちらの観察。
観察している集団に歩み寄る。１体の犬頭が進み出てきた。武装はない。
小柄の犬頭をその犬頭に預け、早足で逃げるように立ち去った。荷物を回収した後は全力で走る。
背後で何か聞こえたが無視した。

離れた位置の小川で血に汚れた手と銃剣と鞘を丹念に洗う。
水面をぼんやり眺めながら、先程のことを考える。
あのまま犬が犬頭の背後から現れなければ、犬頭を虐殺していただろう。負の連鎖の仲間入りだ。生きるための殺傷ならばともかく、あの時はそこまでの緊急性は無かった。任務でもなく、命令でもなく、生き残るためでもなく、単なる殺戮。それをそのうち何とも思わなくなった自分を想像して、ひどくゾッとした。
鬱々とした気分を顔を洗って気持ちを切り替える。
過程はともあれ、今日は十分成果を果たせた。
帰ろう、我が家へ。今日はもう疲れた。本当に疲れた。

ナイトビジョン（前書き）

赤外線の投光装置及び受像装置や光増幅管装置を用いることにより、夜間や暗所でも視界を確保するための装置

ナイトビジョン

６４式の分解清掃の手を止める。あとは作動点検とスリングを取り付けるだけだ。
部品の飛散防止兼、座布団代わりに敷いた毛布から立ち上がる。
もう暫くすれば日が落ちそうだ。急がなければならない。
射撃場の屋上から下りて目当てのものをライト片手に探す。あった。
それと、焚き火台替わりにする配電盤の金属箱を壁から取り外す。
ボルト止めなので工具箱からレンチを使って外す。配線も色々と使い勝手が良さそうだ。トラップ用のワイヤーに使えるかもしれない。
射撃場内で火を使うのは色々とまずい。仮にも屋内射撃場だ。未燃焼の火薬粉末がどこかに残っているかもしれない。なので、屋上に枯れ木とともに持っていく。
急勾配の階段を配電盤を持って上がるのは地味にきつい。もう少し小型のものにすればよかったか。
屋上の中心付近に設置する。この位置なら、射撃場の外から弓矢や槍を投擲されても角度的に当たらない。また、座り込んでいれば位置が特定されない。
因みに、何故屋上で直接火を焚かず、焚き火台を使用するかといえば風防と屋上のコンクリートの保護のためだ。熱で天井のコンクリートの強度が落ちては困る。
なので、床にはコンクリートブロックで隙間を開けておく。配電盤の中にも何個かコンクリートブロックを入れておく。風で配電盤が吹き飛ばされないように重石代わりだ。
それと忘れていけないのが、消火器と消火用砂だ。何かあったときはこいつらが頼りだ。元が配電盤なので蓋がついている。この蓋を閉めれば一瞬で消火できるはずだが念には念をだ。
細めの鉄骨４本の一端を針金で固縛して作った吊り下げ台を用意する。こいつは川の水を汲んできた水筒をぶら下げるのに必要だ。

最後に燃料の枯れ木だ。枯れ木は地面に落ちているものは最初は使わない。湿気を吸っており着火しにくいのだ。なので、立ち枯れしている枯れ木や枯れ枝に最初に着火する。着火剤の変わりは標的代わりだった写真だ。大判の写真を硬くねじって棒状にする。これですぐに燃え尽きにくくなった。湿っている枯れ木や生木は焚き火に引火しない程度の位置に積み上げる。この位置なら熱で乾燥するだろう。

さて、準備は万端。あとは着火するだけだ。だが、今はそれをしない。

柵にもたれかかり、川からの帰り道に収穫した果物類をかじりつつ、夕日が沈むのを眺める。

色々と違和感を感じたり、常識外なものを見たが夕日は記憶の中そのままだった。

そういえば、こうやって夕日をのんきに眺め続けるのは何年ぶりだろう。忙しさにかまけて見る暇がなかったのか、あるいはそんなことに気にも留めなかったか。

異郷の地で見る夕日は何ともいえず切なく美しい。

いやだな、夕日を眺めていると郷愁感に襲われそうだ。まだ一日も経っていないのにホームシックになるとは・・・・・我ながら心細いらしい。

数日もすれば寂しさのあまりに風船に顔でも書いて話しかけているかもしれない。もっとも、風船はないのでコンドームか。・・・・・・・コンドーム万能アイテム過ぎだな。

そんな事を思いっているうちに日は落ちた。徐々に周囲は闇に包まれ始める。

ついに暗闇に包まれた。

暗闇に包まれると視覚が頼りにならない代わりに聴覚が鋭敏になる。虫の声が耳を楽しませる。風に揺られる木々のざわめきと動物の鳴き声は大自然の中にいることを感じさせた。空を見上げれば満天の星。人工的な明かりがない星空はまるで宝石箱だ。目が暗闇に慣れ

ると更に見える星が増えるだろう。残念ながら知っている星座はひとつもないが。
さて、十分周囲は暗くなった。頃合だろう。
ＡＮ／ＰＶＳ－７Ｂ、第三世代型ＮＶＧ（ナイトビジョンゴーグル）を取り出す。
今まで、幾つかＮＶＧを買ってきた。
最初に買ったのはイスラエル製の単眼式（片目用）第一世代（自ら赤外線を発して反射してきた光を感知してみる方式）。こいつはまあお値段相応で解像度も低いは距離もさほど見れないはで散々だった。正直、無いよりはましといった感じだ。
人間の目というのは偉大なもので、暗闇の中にいると３０分後には光の感知能力が物凄く増幅する。特に正面で見るよりは視界の端に写る部分は中々のものだ。これを周辺視と習ったことがある。で、ナイトビジョンを使うとこれが失われる。一度、光を見るとまた再び目を鳴らさなければならないのだ。なので、片目をつぶるか赤いサングラスを着けなければならない。まあ、そんなわけで第一世代はあまりい思い出が無い。
続いて買ったのは、ブッシュネル製のデジタル方式（デジカメの内部機構を使い、赤外線や光を増幅するように調整された方式）の単眼式５倍率。望遠鏡の用に遠距離を見る用途で買ったのだが、これもいまいちだった。ピント調整や光量調整がシビアすぎて使いづらい上、さほど解像度も高くなく遠距離を見渡せるほど感知能力も高くなかった。おまけに、倍率のせいで至近が見れないという致命的さがあった。
それから幾つか買ったものの、求めている性能は無かった。
だが、そんな中ついに理想の物を手に入れることが出来た。
それがこのＡＮ／ＰＶＳ－７Ｂだ。
アメリカ軍使用の第三世代型（月や星の光を増幅して視界を得る方式）ＮＶＧということで、９０年代の品物なのだが解像度や感知能力、使い勝手が今まで買ってきた品物とは違いすぎた。
ネットのオークションで１ヶ月分程の給料を使ってフルセットを購

入したが、満足している。
ＮＶＧ共通の視野が狭いのと、距離感が掴みにくい、装着すると前側が重くなる以外は何も不満点はない。
ただ、重箱の隅をつつくなら、ＡＮ／ＰＶＳ－７Ｂは一つしかない対物レンズで捉えた映像を両目の接眼レンズにプリズムで分岐している関係上、スコープやダットサイトが位置的に覗けないのが少し残念だ。
ともあれ、そんなＡＮ／ＰＶＳ－７Ｂでこれからするのは星空を眺めたりではない。いや、これが肉眼では見ることが出来ない星も普通に見れるから実に良いのだ。都会でも満天の星が見れるのは中々良いものだ。念のため言うが、カップルが多い公園に単身潜りこんでスニーキングミッション等はしたことが無いぞ、本当だ。精々、基地警備訓練の夜間訓練の際にフェイカー（仮想敵）役で散々暴れまわったぐらいのものだ。あれは実に愉快な経験だった。歩哨を何人も捕縛して回ったのは面白かった。
・・・・・・加減しろ馬鹿と怒鳴られたが知ったことではない。
ああ、話がそれた。
今から行うのは、ＮＶＧの光増幅機能を使った捜索だ。
人間は夜に火を使う。暗闇の中で火を焚くと、それは恐るべき程遠くまで視認できる。タバコを吸っているだけで数キロ先で発見される位だ。ただ、この周囲は森に囲まれている。なので、木々が遮るため通常では視認できない可能性がある。また、家の中で暖炉などを使われるとわからない。
だが、ＮＶＧならばそれらも感知できる可能性があるのだ。唯一の問題点は解像度の低さ。いかに、民生品などに比べれば高解像度といえど、肉眼には劣る。人工的な光源を見つけたところで、細部はわからないのだ。
まあ、論より証拠実際に試してみよう。
アイピースを目に押し当ててトグルスイッチをカチカチ捻る。
視界が緑と黒に染まる。これぞＮＶＧ、文明の利器だ。人類は光を

使わずとも暗闇を制した証。
ほんの少し、高周波音が聞こえるが、それ以外は何とも無い。第一世代はこの高周波音が本当に耳障りだった。
周囲を見渡す。
・・・・・・見事に何も光は無い。
少し見渡したが何も・・・・・いや、あった。この方角は・・・・・・。
ああ、犬頭と出会った場所だ。未だ宴の真っ最中らしい。
その他には・・・・・本当に何も無い。星明りを反射したのか時折水面らしき部分が光るくらいのものだ。
・・・・・ふと、足元というか射撃場の周辺を見てみた。
幾つか光が反射した。
二つづつ連なっている、これは目だろう。
フォーカスを合わせる。
・・・・・・犬頭が数体いる。つけられていたか？
観察を続けるが、武装等は無い。
こいつらは何をやってるんだか。
射撃場は頑丈な扉で守られている、開けられることはまず無い。屋上への階段も外側には無い。登ることもこの高さなら大掛かりな道具を使わなければまず無理だ。
危険は感じない。
そんなわけで、捜索は何の発見も出来ずに終了。
やれやれ、徒労だったか。
ＮＶＧのスイッチを切り、ライトに切り替える。
焚き火に火をつける。最初は火が小さかったのが徐々に大きくなっていく。
枝から太目の枝へと徐々に火を移していく。良い塩梅だ。火力が安定してきた。
折りたたみ椅子に座りながらじっと火を見る。引火すると困るので毛布は近くにない。

ああ、何というか和む。張り詰めていた心が緩んでいくのを感じる。
思えば今日は色々あった。肉体的にも精神的にも疲れている。
だが、それも火を見ていると霧散していく。変幻自在に変化する火を見るのは意外に良いものだ。
何といえばいいのだろう？知り合いが誰もいない外国で唐突に親友に出会ったような感覚だ。何も言葉は言わないでも通じるような安心感、そんな感じがした。
日が落ちた後の肌寒さが炎の熱で払拭される。何より、身体よりも心の中に何か暖かさが満ちた。ああ、落ち着く。これで話し相手と酒があれば言うことは無い。無いものねだりだが。
それでも、話し相手はいないが天然のＢＧＭがある。
焚き火の音と虫の音、闇夜に羽ばたく蝙蝠の羽音、未だに寝ていない鳥の鳴き声、風の囁き、獣の遠吠え、木々のざわめきが耳を癒す。
天には星の瞬き、月も綺麗だ。星明りに照らされた雲が流れていく。
木々は黒々とした影。
良い夜だ。
そう思いつつ、まどろんだ。明日もこの光景が見れると良いなと思いながら。

トラップ

目が覚めると周囲は真っ暗闇だった。
腕時計のスイッチを押す。暗闇に慣れた目には文字盤は明るすぎる。
０５：２４・・・・・この時間ならまだ寝てれるなと思った瞬間に目が覚めた。
もう、点呼とかとは無縁の生活だったのを思い出した。
名残惜しいが、もぞもぞと毛布の中から這い出る。
・・・・・・・。
寝床から落ちた。
真っ暗闇だったので、一瞬何が起きたのかわからなくてパニックになりかけた。
屋内射撃場なので床が跳弾予防のための土でよかった。コンクリートの打ちっ放しだったら更に痛い目にあっていたことだろう。
呻きつつ、昨日作った寝床の事を思い出す。
地面に直接毛布を置いて寝たら底冷えするに違いないと思い、折りたたみテーブルを二つ使って寝床を作ったのだ。毛布は腐るほどあるので、それをふんだんに使いフカフカのそれはもう素晴らしい寝床が出来た。枕も毛布だ。
ちなみに、高床式寝床にしたのはもう一つ理由がある。
寝ている間に虫や蛇が寝床に潜りこんでくるかもしれないので、その可能性を少しでも減らしたかったのだ。まあ、落ち葉など遮蔽物が一切無い土しかない射撃場内にはあまり入ってくる可能性は無かったが。
それと、もう一つ虫対策をした物がある。靴だ。
編上靴には脱いだ後に、履いていた靴下をそのまま被せておいた。
こうすれば虫が入っていることが無い。クウェート勤務の際にサソリが入ってくる可能性があるので教わった方法だ。まさか、また行うとは思わなかった。

懐中電灯で探して履く。
ああ、それと６４式だ。弾帯には装備一式が付いているので、これとリュックで大体準備は完了する。
重たい金属扉を開けて、外へ一歩踏み出す。既に日は昇っていた。
さて、今日は何が出来るだろう。
ああ、その前に、靴紐を結ばないと・・・・。

とりあえず、今の急務はトイレの設置だ。
衛生管理は重要だ。
射撃場から少し離れた位置、一応風下らしいところに穴を掘る。
木の枝で掘ったが物凄く効率が悪い・・・・。射撃場内の資材置き場に草刈用具と共にスコップ等があるかもしれないので後で探しておくことを心に誓う。
それはともかく、限界が近い。
装具類を外すのももどかしい。
ああ、何とか間に合った。
狙撃、監視任務中の狙撃手じゃないのに服の中に漏らすなんてのは悪夢だ。
満ち足りた一瞬を過ごした後に、はたと気が付いた。
紙が無い。
・・・・・・。
様々な手段が脳内を巡る。
どれもこれも非現実的か衛生的じゃないか、精神衛生上よろしくない物ばかりだ・・・・。
そんな中でもっとも実用的なものというと・・・・。
周囲を見渡す。
アレが適当だ。
しゃがみこんだ格好のまま、ずりずり近寄る。
木から葉っぱを一枚手にとる。手触りは問題ない。毒性が無いかを手を使ってチェックする。うん、かぶれない。

念のために、噛んだり、口内の粘膜で調べてみたが問題なかった。
因みに、この葉は意外に爽やかな風味がした。何かに使えるかもしれない。
ともあれ、トイレの問題は完了した。
装具を手早く身につける。
そこで、ふと思い出したことがある。
そういえば、昨日この周辺にいた犬頭は何処に行ったのだろうか？
・・・・・・・背後を見る。
興味津々といった感じの犬頭が何体かいた。
いつから見られていたのだろうか・・・・あまり考えたくない。

顔を洗うついでに水分の補充をしようと湖に向かって歩いている。
歩きながら昨日収穫した木の実で朝食だ。
美味いのはいいのだが、流石に飽きがくる。もう少しバリエーションが欲しい。何より、この食生活だと塩が体内から減ってきて体調を崩す可能性が高い。
タンパク質、脂肪、ビタミン、ミネラル、微量元素をバランスよく摂取しなければならない。
狩りか釣りが必要だ。
水を補充したら狩りに必要な情報を色々と調べなければならない。
トラップを仕掛けようとも思ったが、それは断念せざるをえなかった。
その理由は・・・・・。
背後を一瞥する。ゾロゾロと犬頭の一団がついてくる。
・・・・・・・・・・・こいつらがトラップに引っかかる可能性が高いからだ。
トラップというのは効率がいい。
何故ならば、トラップは一度仕掛けてしまえば、それの様子を見に行ったり補修するだけで良いのだ。時間が自由になり、それ以外の作業が出来る。

その反面、対象が無差別だ。一応、仕掛ける位置やサイズ、種類で対象を絞ることが出来る。
スネアトラップ（紐やワイヤで輪を作り、引っかかると締まって捕獲する種類の罠）なら、仕掛ける位置さえ気をつければ二足歩行の生き物ならば無傷で外せるように設置することも出来る。だが、それでも仕掛けないに越したほうがいいだろう。
デッドフォールトラップ（罠にかかると重量物が落ちてくる種類の罠）や、スピアトラップ（罠にかかると槍が刺さる種類の罠）は危険度が高すぎる。
もし俺が仕掛けたトラップによって犬頭が死傷してしまった場合、敵対関係かそれに近い状態になる可能性が高い。それだけは拙い。
こちらのアドバンテージは銃の有無だけだ。
平地等での遠距離戦ならば、多少の数的な優位など無視できる。それが森林等で遭遇戦の場合等は正直勝ち目は薄い。おまけに、既に射撃場の位置も判明しているのだ。篭城してもいいが、食料が尽きれば終わりだ。なので、犬頭が引っかかりそうなトラップは使えない。
そうなるとまあ、俺が知っている罠のほとんどが使用できない。
唯一使えそうなのは鳥用のヌーズスティックトラップ（鳥が止りそうな木に紐で輪を作り、止ると締まって捕獲できる罠）とかだろうか。位置的にもこれならば安心だ。
これは、餌場等を調べておこう。昨日果物を収穫した周囲等が良いかもしれない。鳥の糞が落ちていた辺りが良さそうだ。どのタイプのトラップもそうなのだが、動物の習性を熟知していなければ効果は無い。無駄な位置に仕掛けるのは時間と労力と資材の無駄だ。全ては有限なのだ。
そういえば、魚用にもトラップは使える。
木の枝やツルでカゴを作れば、一定以上のサイズの魚のみが取れるので安心だ。小魚は逃げていくのだ。
ただ、魚用のトラップには根こそぎ捕ってしまうものがあるのであ

るので注意が必要だ。ダムと網を使うタイプは特に危ない。
一時的な滞在ならともかく、長期間いる可能性が高いのだ。
根こそぎ捕ってしまっては、それ以降魚が手に入らなくなる可能性があるのだ。それは拙い。あくまでもバランスを考えねば。
さて、そんな事を考えている間に湖に辿り着いた。犬頭がちらほら見える。
・・・・・・・・・・昨日見たときよりも明らかに増えている。６０はいるようだ・・・・。背後にいる一段と合わせれば７０体はいるだろう。
ついでに、昨日見た巨大な犬もほぼ解体されつくされていた。ほとんど骨だけだ。
肉を干したり、皮を水につけたり色々と有効活用されているようだ。骨も道具に加工されているのも見かけた。随分とエコである。
ふと、良い匂いがした。
肉の焼けるにおいだ。犬焼き肉だろう。
ああ、この匂いは毒だ。長時間いたら切なくなりそうだ。
顔を洗って、うがいをして水分を補充したら退散しよう。
はあ、早く狩りを成功させよう・・・・。

ブリーフィング（前書き）

作戦前の打ち合わせ。

＊おまけ

http://ansaikuropedia.org/wiki/%E3%83%96%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%83%E3%83%B3%E3%82%B0

すみません、これがやってみたかったんです・・・。

ブリーフィング

湖の下流で顔を洗っていて物足りなさを感じた。やはり、石鹸が欲しい。ひげも少し伸びている。銃剣で剃るのも怖すぎる。本格的に伸びてきたらツールナイフで剃ることにしよう。

それにもやはり石鹸がいる。動物の油脂と灰を煮詰めれば出来るはずだが、それには狩りが必要だ。

歯磨きについても同様。今日のところは生木の枝を折り、先端をグスグスにして簡易歯ブラシに使っている。出来れば動物の毛でブラシを作りたい。一応、ブラシはあるのだ・・・・。問題は、銃の清掃用のブラシなので油脂が大量に付着している。流石にこれは歯ブラシに使いたくない・・・。そんなわけで、歯ブラシを作るにも狩りする必要がある。

また狩りだ。最終的に全てそれに行き着く。だが、狩りはメリットに対してデメリットも多い。

メリットの一つ目は、大量の食料が入手できる。それは成人男性が数日間余裕で食いつなげる程大量な肉に油脂、栄養が大量に含まれる内臓や血液。これは生きていくうえで不可欠だ、定期的に摂取せねばならない。

メリットの二つ目は、道具の材料が出来る。革製品、石鹸はもとより、骨や爪に筋等、加工すれば様々な用途に使える材料が手に入る。筋は植物のツルとは異なった性質を持っているので応用すれば非常に役に立つ。革製品は作るのが大変だ。脳と油脂を煮詰める必要がある。また、多大な時間がかかる。便利ではあるのだが・・・。

それらメリットに対してデメリットは、リスクの大きさだ。サバイバルの基本が一つある。摂取できるカロリー以上の運動をしてま

で食料をとる必要が無いということだ。つまり、狩りで獲物をとるよりも効率が良い物があるならそちらを選択しろということだ。また、時間もかかるし、危険度も高い。

それでも、心惹かれる物がある。狩りというのは、生物の命を奪う残酷な行為だ。だが、有史以来人類はずっとそれで生き延びてきた。獲物にとって不本意だろうが、それは神聖な行為だ。近年はスポーツ感覚での狩りが多いが、それでも根底に流れるのは大地賛歌だ。その精神性には心から賛同する。実を言えば、ずっとやってみたかったのだ。

日本では狩猟をするというのは色々とハードルが高い。様々な免許や資格、予算に労力、時間を多大に浪費する。ライフルを所持できるようになるまで最低で１０年掛かる。世間の目というのもある。何かと苦労するのだ。

そういえば、本来昨日行うはずだった弾薬の消費に参加していたメンバーの中には狩猟免許を持っているのが何人かいた。ライフルの所持免許を持っているのも何人かいた気がする。あと、気のせいだと思うがペリカン社製の防水ハードケースやソフトケースを持ち込んでいたのが3人いた。・・・・・・・・あれはどう見ても銃器用のケースにしか見えなかったが・・・・・。まあ、気にしないようにしておこう。

ちなみに、射撃場内の一角には他人の装備や所持品の類が山のようになっている。まだ手をつけてない。恐らく、さぞかしサバイバルに役立つ物が満載だろう。まあ、こんな緊急事態だ。多少使っても許してくれるだろう、多分。

今日の方針が決まった。

午前中は狩りの情報収集。午後は狩りの装備の準備だ。明日は早朝から狩りだ。

どうせなら、大物が良い。狙うは体重５０ｋｇ超のシカモドキ。奴の生態を調べてみることにしよう。

トラッキング（前書き）

追跡しデータを収集すること

トラッキング

さて、予定が決まったところで行動に移る。

犬頭の宿泊しているシェルター付近、湖から更に下流に歩いていく。しばらく歩き続ける。砂浜にて探していた物を見つける。

蹄のあとだ。真ん中から左右に４本に分かれている。偶蹄目だ。鹿や牛、猪等がこれにあたる。何十頭もいるようだ、幾つか異なるサイズが見受けられる。水場に来ているということは草食動物の可能性が高い。肉食動物は獲物の体液から水分を摂取するので水分の摂取量が少なめだ。

更に観察を続ける。足跡に明瞭な物と、不明瞭な物が見受けられた。一部は輪郭が崩れているのだ。体重が軽くて接地圧が低いから・・・・いや、違う。

足跡を手で触れてみてわかった。湿り具合が違う。これは・・・・時間差であろう。

何十頭もいると思ったのは勘違いかもしれない。これは、数頭が毎日通っているのだ。明瞭な足跡は湿り気をたたえていた。これはそれほど時間がたっていないことを現していないのだろうか？そして、今の時刻はまだ朝。数時間後には足跡、地面が抉れた後の水分は蒸発して乾く。それが風で輪郭が崩れて不明瞭になる。そう考えるのが順当であろう。事実、自分の足跡を触ると湿り気を感じた。明瞭なシカモドキの足跡と、俺の足跡の湿り具合はさほど差は無い。つまり、さほど時間はたっていないのかもしれない。

つまり、暗いうちからここで待ち伏せしていれば狩れる可能性が

ある。狙撃ポイントは・・・・・草をちぎり風向きを見る。風下にある木立の付近がいいだろう。距離は・・・・・概算５００ｍ。これくらい離れていれば、多少風向きが変わっていても匂いで気がつかれないはずだ。それに、木立の付近はここより高度が少し低い。つまり、朝の段階なら俺の匂いが温度で上に向かうことも無い・・・。まあ、この位置なら妥当なところだ。

あとは・・・・・足跡をたどって、狙撃ポイント付近に向かっていないかを確かめるのと、出来ればフンが調べたい。何を食べているかを調べれば役に立つかもしれないのだ。

しばらく足跡を追跡していると、木々の枝が折れたあと、くもの巣が破れたあと、様々な痕跡が見つかった。中には樹皮に傷跡が残っていた。これは角の痕だろうか？この生き物の武器のようだ。高さは俺の胸から顔面ほどだ。気をつけないといけない。

また、樹皮には毛が何本も見つかった。このウッドランド迷彩風味の色はシカモドキに間違いない。いや、本当にこいつの毛皮は天然のギリースーツに使えるんじゃなかろうか。

フンも見つけた。いや、良かった。フンの中には動物の毛らしき物や、昆虫類の外骨格片は一切見つからなかったのだ。砂らしきものや植物の繊維屑らしきもの等は見つかった。これでシカモドキは完全な草食動物だというのがわかった。調べたところ、主食は樹皮や木の芽、木の葉、草等のようだった。ただし、食べている量が尋常ではない。というよりも、フンの量が尋常ではなかった。正直、フンの量から何頭いるのか推測は全く出来なかった。

それからしばらく追跡を続け、草原に出てきた。

草原の各所にシカモドキの痕跡があった。寝転んだ跡、草を食べた跡、泥遊びした跡・・・・・。

この様な草原も狩場に使えるかもしれない。トラップを仕掛けたいが、まあ無理なので諦める。何故なら・・・・・相変わらず犬頭が背後にいる。こいつらが引っかかりそうだ。

正直、こう着いて来られては狩りどころの話ではない。俺が身を隠していても、こいつらが見つかる。最初の頃は微笑ましく思っていたが、そろそろいい加減鬱陶しい。

当初は俺のことを警戒して監視しているように思っていたのだが、観察した結果違ったようだ。俺の行動を目で見て盗んでいるらしい。徐々にだが、犬頭の装備や行動に変化が見られるようになったのだ。真似されている。

俺が普通に行動しているつもりだが、あちらにとっては新鮮に見えるものが多いのかもしれない。休憩中に荷物を下ろした際、肩をほぐしていたのを犬頭が真似していたのには思わず笑いがこみ上げてきた。いや、犬頭の軽装具合では肩がこるようには思えなかったのだ。こちらがシカモドキのフンを調べているのも真似されていた。何をしているのか理解されていればいいのだが・・・・。変な趣味の持ち主だと思われるのはたまらない。

また、装備についての変化は短槍を所持方法に現れた。当初見たときは、手に持っていた。それが、いつの間にか革紐らしきもので肩から吊るすようになっていた。これは今俺がしている６４式を肩から吊るしているのと同様だ。また、弾帯を真似したのだろうか、革紐をベルト代わりにして、それに小物をぶら下げる様が多く見受けられた。これも当初は見られなかった行動だ。

そうかと思えば、一定距離から近づいてこない。こちらから近づこうとすれば一歩引くのだ。直接被害が無いから性質が悪い。追い払おうにも気兼ねするし、また戻ってきそうなのだ。どうすればいいだろう。顎をさすりながら考えていると真似された。勘弁してくれ。

それにしても、犬頭も暇なのだろうか？こんな人数というか頭数がふらついている余裕があるようには思えないのだが・・・・。逆に考えると、それだけの頭数が俺の近くにいる、何かを目で盗むメリットがあるのだろう。それからするならば、もっとメリットになるようなものがあれば、それに注意がいくのではないか？そんな事を思いついた。

A案　何か食料調達して、それを引き渡す。それを加工するのに人手をとらせる。
却下。そんな食料があれば俺が食う。

B案　ばれない様に妨害工作をして、それの対処に人手をとらせる。
却下。友好関係は崩せない。そもそも犬頭のメリットにならない。

C案　道具の製作技術の伝達。それの製作に人手をとらせる。
条件付採用。その様な都合のよいものがあるか？何より、犬頭にとってメリットに感じるような魅力的なものであるか？それを勘案せよ。

脳内評議会の結果、C案を採用。現代知識の応用により、犬頭の生活を向上することに決定した。幾つか案はある。だが、それの大半はこちらのデメリットになるものだった。

簡単に言うとだ。俺の知識で、この時代の技術レベルの道具の性能向上というと・・・・・武器の性能向上しか思い浮かばなかったのだ。それは、まずい。その矛先は俺に向く可能性があるからだ。

正直、犬頭を信頼してはいなかった。今の関係は薄氷の上で向かい合っているようなものだ。こちらが犬頭にとって未知数の武器と能力を持っているのに対して、犬頭には数がある。そんな中でこちらが弱みを見せたらどうなるか・・・・。

因みに、犬頭はまだ全てを俺に見せていないと思っている。何故なら、こんな狩猟も採取もあまり行っていない種族が１００頭もの数でまとまっていること自体が異常だからだ。考えても見て欲しい、人間百人が森の中で食料を定期的に採ることが出来るだろうか？無理だ。山の恵みは数あれど、１００人もの人数を満たすとなれば不可能ではないかと思う。

つまり、何らかの手段で食料を調達しているか貯蔵している事になる。だが、犬頭達の軽装振りを見ると、貯蔵はしてないように見えた。また、全体的にある程度飢えているが、現状からすれば若干余裕があるようにも見える・・・。何というか、情報が足りない。そもそも、犬頭について何も知らないことに気がついた。

彼らのことも調べてみるべきだろう。現状の友好的な相互不干渉的な関係からの状態改善。その上で友好的な彼らとの相互理解、それが生きる上で重要なことになるに違いない。昼休憩がてら彼らの観察をしてみよう。座り込んで食事をしているだけなら、さほど警戒されないに違いない。

それにしても、食事中も休めないとは、日が出てる間は本当に休

む暇が無いな。そのうち、風呂でも作ってのんびりしよう。

テリトリー（前書き）

縄張り

テリトリー

縄張り行動というものがある。ある一定のエリアに入らせないようにし、独り占めすることだ。
野生動物においての縄張り行動には２つの意味がある。
１つ目は子孫繁栄。繁殖のための巣の近くに近づけさせないということだ。
２つ目は食料確保。食糧確保するためのエリアに入らせないということだ。
これらの行動は野生動物だけ行うものではない。
人間だって同様な行いをする。
家、つまり不動産の所有等は人間にとっての縄張り行動だろう。

で、何故今このようなことを考えていると・・・・。
犬頭から熱烈歓迎されているからだ。

普通に考えてみよう。
他種族、おまけに面識もほとんど無いような存在は排他的になるのではなかろうか？
おまけに言葉が通じず意志の疎通も行えないような状態では。

具体的に言おう。犬頭の村と言うべきか、仮住まいのシェルターの中心で、俺は犬頭達と食事していた。もちろん、自分から進んでここに来たわけではない。

数分前、犬頭のことを少し観察しつつ、村から外れた川辺に座り込んで食事をしようとしていた。
で、座り込んでいい加減食い飽きてきた果物を食べていると、色々と顔なじみになった小柄な犬頭が近づいてくるのに気がついた。

今まで犬頭は積極的にこちらに関わってこなかったがどういうことだろうか？

その犬頭はこちらに話し？かけてきたが、当然理解は出来ない。
因みに、当初は犬猫が鳴いているだけに聞こえたのだが、良く聞けば何らかの言語のようだった。
正直驚いた。

犬頭は色々と話しかけてきたが、俺は首をかしげて理解できない旨を示した。
何度も話しかけられたが、ついに諦めたようだ。
少し申し訳なく思う。

そして、犬頭は俺が持っている果物に気がついたのか、じっと見てきた。
まだまだストックはあるので犬頭に一つ渡してみる。犬頭はおっかなびっくりその果物を受け取った。

恐る恐るといった感じで果物を口に運ぼうとする横で、俺は如何にも美味しそうに食べる。
それを見て安心したのであろう、犬頭は一口かじりついた。

・・・・今更だが、犬頭って雑食だったんだな。
そういえば、犬焼肉ぐらいしか食べている記憶が無い。

さて、そんな事を考えながら犬頭のことを観察していると、果物を嬉しそうに食べていた。
犬頭は感情が表情に表れやすい。
むしろ、身体全体で表す。
耳、尻尾、表情、その他諸々を観察していると飽きない。

可愛いと思う。

　それにしても、正直何故そこまで嬉しそうなのかわからない。
普通に森に実っていた物なんだが。
まあ、喜んでもらえたようで何よりだ。
それに気を良くしたというわけではないが、果物を幾つかリュックの中から取り出し犬頭に渡した。
尻尾の振り具合と良い、物凄い喜んでいた。

　で、その後に犬頭に引っ張られるまま、村の中心に連れてこられて今にいたる。
何かの動物の皮を座布団代わりに俺はくつろいでいた。
小柄の犬頭は俺に慣れたのか、やたらくっついてくる。
嫌がるといけないので、頭頂部の耳に触らないように撫でてやると心地良さそうだった。
何というか癒される。
犬頭の頭を撫でながら、少しこの村のことを思い返してみた。
最悪、逃走する際のルートを考えないといけない。

村の構造はこんな感じになっている。
村は恐らく水害対策なのだろうか、湖のほとりから少し離れた位置にある。
今は大丈夫だが、増水時や雪解けの季節などは危ないのかもしれない。
そのような時は注意しなければいけないと肝に銘じる。

　忘れてはいけない。
犬頭は外見は人からかけ離れてはいるが、かなりの知性を持っている。
道具の使い方、何らかの言語を持っていることからするならば人間

に匹敵する。
つまり、犬頭達の行動、動作を見て盗めば生存する可能性は飛躍的に高まる。
野外生活の経験は明らかに犬頭のほうが積んでいる。
犬頭の一見謎に思える行動も、全て経験則に基づいたものに違いない。

改めて村を観察する。
村は綺麗な円状に広がっていた。
これはどのような意味があるのだろうか？犬頭の慣習なのか本当に綺麗な円なのだ。

村の中心には、キャンプファイアーのような巨大な焚き火の跡、その周りは集会場のような雰囲気だ。

夜にはここで皆で語らいあうのだろうか。
それから少し離れてインディアンが使っていたような簡易型のテント群が円周上に並んでいる。
更にその外周には小規模な焚き火が並んでいた。
こちらはまだ火がついていた。
煮炊き用の火と照明用の火は別なのかもしれない。
つまり、中心の巨大な焚き火がメインの明かりで、外周の焚き火がサブの明かり兼、火種、調理、その他多目的な使い方をされているようだ。
それを効率よく使うための円状の村なのだろう。

その他にも、色々と見方を変えると工夫が見られた。
一見無秩序に置かれている物も、効率重視で置かれているのがわかる。
各テントがそれぞれ役割を持っていて、それが関連しているグルー

プで分かれている。
良く見れば、テントにはそれぞれの役割によって飾りがついていた。
色彩ではなく形状で区別しているのは、夜のことを考えているのだろうか？

例えば、一つのテントを例にとる。
テントの屋根には逆三角形の灰色の毛皮で作った看板が掛かっていた。
このテントは育児用のテントのようだ。
大き目のテントだが、周囲に焚き火は無い。
周囲で小柄な犬頭や、犬みたいに四足歩行で歩いてる小さな犬頭がいた。
それを見守る何頭かの犬頭の行動は母性を感じさせた。
犬頭は村全体で誰の子供かを区別しないでまとめて育児しているようだ。
村自体が家族なのかもしれない。

それと、忘れてはいけない物が一つあった。
畑だ。

最初見たときは畑だと思わなかった。
犬頭は昨日ここに村を作ったのを覚えている。
それが、もう作物を収穫しているのはおかしい。
だから、それが畑に最初は見えなかったのだ。
精々、畑を作る前段階で開拓している最中だと思っていた。
根菜類なのか、やせ細った緑色のニンジンのような作物を手際よく収穫していくのは、まるで草むしりのようだった。
それが、等間隔で法則性をもって生えていなければ、本当に雑草にしか見えなかっただろう。
また、収穫直後に種を蒔いた瞬間から芽が出ているのを見たときは

驚いた。
本当にこの世界は色々とおかしい。
だからこそ面白い。

気がつけば、犬頭が目の前の焚き火跡を中心にゾロゾロ集まって座り込み始めた。
概算で村全体集まっている気がする。
次はどんな面白い物が見れるのだろう？
楽しみだ。

MRE（前書き）

Meals, Rarely Edible（滅多にないメニュー）

MRE

目の前には竹の様な植物で作られた器が三つ並んでいる。
汁、主食、飲み物の三つだ。
汁は肉と野菜のごった煮。
汁の量に比べて具が多い。
主食は茶色の見たことが無い穀物のお粥。
飲み物は乳白色の液体。
飲み食いするためだろう、木彫りのスプーンも添えられている。

全員に配食が済んだようだ。
身なりの良い犬頭の一声で食事が始まった。

そして、俺はというと少し悩んでいた。
正直に言おう。
食が合わない、人体に有害な物が含まれていないか不安だったのだ。
更に言えば、故意に毒物が混入されている可能性も否定できなかった。
恐らく杞憂だろう。
だが、わからない。
可能性は減らすべきだ。

荷物の中から箸を取り出す。
その箸で汁の具を一つまみする。
箸の向かう先は隣の果物を食べてる小柄な犬頭。

鼻先に具を突きつけると、犬頭は困惑したのか耳をペタンと伏せさせる。
それにも気にしない風に口元に近づけてやるとおずおずといった感

じで食べた。
良くやったといった感じで頭を一撫でしてやる。
伏せていた耳はピンと立ち、尻尾の動きはせわしなくなった。
ふむ、まあ即効性の毒とかは無かったようだ。

引き続き、主食と飲み物を毒見させる。
犬頭は嬉しそうだった。
本当に行動がいちいち犬っぽく見ていて飽きない。

まあ、毒物等については安心なようだ。
そろそろ、俺も一口頂こうと思ったのだが、そのときようやく気がついた。
周囲から見られている。
敵意とかは感じられない。
まあ、よそ者の存在が珍しいのだろう。

汁を一口、口に含む。
薄味だが美味い。
塩がベースに、肉と野菜の味わいが絶品だ。
素材がそのままの素朴だが、繊細な味わいのスープは、昨日から果物しか食べていない俺には刺激的過ぎた。
満足の吐息がこぼれる。

肉は犬肉だろう。
硬いが、前歯で噛み裂き、奥歯で噛み締める度に、肉の濃厚な旨味が染み出してくる。
かなり長い時間、煮込んだはずなのに、ここまで肉の風味が残っているは面白い。
臭みが残っているのも良い。
鳥とも、豚とも、牛とも似ても似つかぬ風味だ。

野菜はヨモギの様な草だった。
これも良い。
口に含むと青臭さ、噛むと若干の苦味、最後は爽やかな後味を残していった。
肉に合う。
むしろ、肉の臭みを抑える為に入れられているのだろう。
食感も良く茹でられて柔らかくなっている物と、若干の歯ごたえが残っている物の二種類がある。
時間差で入れたのだ。
味わいに変化があって、これは面白い。

正直驚いた。
犬頭の味覚は人間に近い。
更に言えば、作った犬頭はかなり料理が上手いに違いない。
そう思ったら、主食のおかゆに手を伸ばさざるを得ない。

スプーンですくい一口。
少し塩が入れられているようだ。
謎の穀物は少し歯ごたえがあり、噛めばプチプチとした感じの食感だ。
唾液と含ませるように口内で何度も噛み締める。
少しの甘みを感じる。
デンプン質のようだ。
ならば、良く噛まなければならない。
おかゆなので流し込むことが出来るのだが、消化に悪い。
何より、食感が楽しいのだ。
良く噛めば、様々な旨味が感じられる。
茶色の見かけのわりに、本当に繊細な味わいだ。

正直、塩は余分に思ったが、これはまあ些細な問題だろう。

最後に飲み物を口に含んだのだが・・・・・・。

これには少し困惑した。

酸味に苦味が混じった飲み物だったのだ。

正直に言うとあまり美味しくない。

川の水で冷やされているのか、冷たいのでこれも非常に気を使って作られているはずなのだが・・・・。

もう一口、口に含んで舌先で口内で味わう。

苦味以外に甘みと慣れ親しんだ風味を見つけた。

・・・・・・・・これは酒だ。

度数は3パーセント程度だが間違いない。

原料は何だろうか？

正直想像できない。

酒は糖分かデンプン質があれば、何からでも作れるのだ。

それと、この酒は恐らく失敗作ではない。

このような味か、このような味しか作れないのだ。

ならば、少し味わいを変えてみよう。

果物を一つ取り出して銃剣で輪切りにする。

果汁を一絞り。

絞り終わった輪切りを酒の中に沈める。

絞っていない輪切りに切れ込みを入れて、竹の器の飲み口に輪切りを刺しておく。

まるで和風カクテルのように華やかになった。

飲むと苦味を少し感じなくなり、酸味と甘みが合わさって別の飲み物のようだった。

逆に苦味が最後のアクセントになり、渋めの通好みの味わいだ。

乳白色だった色も若干カラフルになり良い感じだ。

これは美味い。

隣の犬頭にも勧める。
一声、何か呟いた。
美味かったらしい。
余った輪切りを周囲に配るように持たせる。
犬頭は驚いたのだろう。
こちらを見てきたが、意図を理解したようだ。
周囲に配り始めた。
周囲から感嘆の声が聞こえる。

ああ、良い事をした。
良い食事には、良い酒がつきものだ。
今回ので犬頭の食生活に若干の潤いが持たされたなら、これに勝る喜びは無い。
少なくとも、一食のお礼は出来たように思う。
少しでも信頼してもらえればいいのだが・・・。

幕間1　コボルト

あたしの名はナーフ・ユーノ。
ナーフは村の名だ。
ユーノは生みの親につけられた。
番(つがい)を組んだら、名前が変わる。
今はナーフ村のユーノだ。
だが、ナーフ村はもう無い。
ナーフ村は七日前に消えた。

その日、あたしは成人する日だった。
気に入ったオスがいれば、番になれる。
そんなハレの日だった。
でも、気に入るようなオスはいない。
周りにいる成人したばかりのオスは、まだ子供に思えた。
自分で作った石の短剣を見せびらかしたり、狩りで捕った獲物の毛皮を見せびらかしてくるばかりだ。
綺麗だと思う。
作るのに凄く時間がかかったのはわかる。
でも、あたしが求めているのは、そんな事じゃない。
言葉では表せない。
まあ、時間はまだあるのだ。
良い相手が見つかり、あたしも生みの親のように素敵な番になれるだろう。
その時は、そう思っていたのだ。
それが来るまでは。

その日に、悪魔が現れた。
黒く、巨大な影が村を引き裂いた。

デビルドッグだ。
男衆は村を守るために戦った。
全員、死んだ。
その中には、あたしの生みの親の片割れがいた。
あたしの村は、生まれた子供は村全体で育てられる。
村自体が家族であり、血族だ。
生みの親というしばりは、あまり無い。
それでも、あたしの生みの親の片割れがいなくなったのは悲しい。
信じられない。
でも、気にしてはいけない。
それが、この村の掟だ。
死は悲しい。
別れは辛い。
だが、死は幾らでも溢れている。
些細な事に気にかけていたら、村が全滅する。
今みたいに。
我が種族は、力が弱い。
戦うすべが無い。
無力だ。
元々、地の恵みを受けて、植物を育てて細々と生きていた。
強い種族が住処に近づいてきたら引き、逃げる。
それで、今までは生き延びてきた。
我が種族を襲っても何も利点は無い。
その時までは、そう思っていた。
男衆が全滅してからは、毎日逃げ回っていた。

村のあった場所は既に何処かわからない。
奴らは、いつもあたし達を見ている。
背後から時折、悲鳴が聞こえた。
また、食われた。

目的の地に着いた。
竜の巣だ。
ここに住んでいる竜は強い。
この地ならば、デビルドッグも好き勝手できないはずだ。
だが、竜がいる気配は無い。

竜の気配は、独特だ。
存在するだけで、空気が違う。
静かになるのだ。
虫も、鳥も、風さえも静かになる。
それが無い。

竜はどこに行った？
わからない。

でも、わかることがある。
ここで、あたし達は死ぬんだ。
竜なら、守ってくれると思っていた。
その竜がいないのならば、守ってもらえない。
だから、あたし達は死ぬんだ。

生みの親は、既に両方食べられた。
あたしが食べられていないのは、若くて動きが早いだけだ。
今日か、明日には食べられるだろう。

湖の畔に辿り着いた。
ようやく、水が飲める。
重い身体を必死に動かした。
だが、思う。
生きていて、何の意味があるのだろう。
生きていても、食われるだけだ。
それでも、生きたい。
食われるにしても、腰から吊るした石の短剣で一突きしてやる。

湖畔には変な生き物がいた。
緑一色の生き物が座り込んだまま、何かをしていた。
飽きないのか不思議な位に、ずっと同じ事をしている。
本当に、この生き物は何なのだろうか？

その生き物は唐突に立ち上がった。
思ったよりも大きい。
あと、緑一色と言ったのは間違いだ。
この生き物はニンゲンだ。
緑なのは服を着ていたからだ。

ニンゲンは危険だ。
何をするかわからない。
それでも、このニンゲンは安心だ。
鎧も、剣も、何も持っていない。
ニンゲンは弱い。
武器が無いと何も出来ない。
男衆がいないあたし達でも、狩ることができる。
気の毒だが、ニンゲンはあたし達に、狩られる。
内心、良い気味だと思った。
あたし達の苦しみを、あたし達の嘆きを味わえ。

無防備なのが、悪いんだ。
囮になって、少しは時間を稼げ。
そう思った瞬間に、悪魔が現れた。
次の餌を求めてデビルドッグが姿を現したのだ。

逃げようと思った。
でも、逃げれなかった。
足に力が入らない。
手が、足が無意味にバタバタ揺れる。
嫌だ！
食べられたくない！
あたし達は食料なのか！
嫌だ！
そんなの嫌だ！
助けて！
誰でもいいから！

徐々にデビルドッグが、近寄ってくるのがわかる。
目の前に迫る。

生みの親の顔を思い浮かべた瞬間に、『それ』は起こった。
デビルドッグの右目が消えた。
一瞬後に大きな音が聞こえた。
デビルドックは倒れた。
……死んだ。
何が起きた？
これは、攻撃か？

あたし達では出来ない。
では、誰が？

背後を見る。
ニンゲンが寝転んでいる。
そのニンゲンの横に黒い塊が見えた。
驚いた。
あれも、デビルドッグだ。

理解が出来なかった。
デビルドッグをあんなに離れた位置から一撃で倒すのは不可能だ。
魔法でも、魔術でも無理だ。
ならば、それを何と言えば良いのか？
奇跡だ。

そう思った瞬間、あたしは駆けていた。
あのニンゲンが助けてくれた！
あのニンゲンが生みの親の、村の仇を討ってくれた！
後ろから「危ない！」、「近づくな！」「ニンゲンだぞ！」と、聞こえる。
でも、気にしない。
本当は死んでいた。
確かに危ないかもしれない。
死ぬかもしれない。
でも、食われて死ぬよりは、ましだ。

良くわからない物に背中を押されて、懸命にニンゲンに向かって走った。
そのニンゲンは痩せて背が高くて、目つきが鋭かった。
服は今まで見たことが無い、変わった物を着ていた。
そのニンゲンに、あたしは抱きついた。
ニンゲンは生みの親がしてくれたように、頭を撫でてくれた。
耳に当たらないように、気をつけてくれる。

多分、このニンゲンは優しい。
何故か、今までで一番安心できた。

このニンゲンと番になりたい。
何故かそんな言葉が胸に浮かんで、消えた。

幕間１　コボルト（後書き）

すみません、ビール１リットル呑んだ後、勢いで書いてしまいました。
書き終わった後は、更にビール１リットルと泡盛をロックで０，５リットル呑んでました・・・・。
次回は普通に本編です、多分。

フィールドクッキング（前書き）

野外料理

フィールドクッキング

当初は、普通に昼食にお酒が付くだけだったのが、何故か本格的な宴会になっていた。
途中から、酒が蒸留酒に変わった。
これは美味い。
体感だがアルコール度数は３０度前後。
味は苦みばしったブランデー風味。
まだ若く、まろやかさが無いがそれも良い。
最初の一口でむせかけたが、面白い味だと思う。
一口含み、舌で転がし、鼻で楽しむ。
一瞬アルコールが自己主張する。
甘みと苦味、少しの酸味、後味も悪くない。
若々しさを感じさせる、仄かに残る爽やかな香りも良い。

それに対するつまみは、犬肉の串焼きだ。
串に刺さった犬肉に齧り付く。
少し冷えてしまっているのが、かなり悲しい。
噛めば肉汁が染み出す。
生臭味がもったいない。
前歯で噛み千切り、犬歯で切り裂き、奥歯ですり潰す。
肉は食感を楽しみ、それに集中するのが美味しく食べるコツだと思う。
犬肉の串焼き自体は、食感がとても好きだ。
脂身が少なく、肉が程よく硬い。
本来は焼く為の肉ではないが、シチューやカレー用の牛肉を焼いたのに似ている。

シチューやカレー用の牛肉は安い。

また、脂身も少ない。
筋肉の塊なので硬い。
だが、それがいい。
確かに、焼くための牛肉の脂は美味い。
霜降りの蕩けそうな肉も良いと思う。
酪農家の肉の臭みを消すための努力は、俺の想像を超えるほどの苦行だ。
日本で売られている牛肉は、本当にレベルが高い。
だが、肉の本質は違うと思う。

肉が本当に美味い食べ方は、生か焼いただけの肉食べることだ。
それは人間の本能に刻まれている。
何故ならば、それが一番肉の味を味わえるからだ。
肉を煮るときは、肉の足らない味わいを補うための何かを継ぎ足すか、肉自体が料理の補佐に回るのかのどちらかだ。
今回の煮物向けの犬肉を串焼きで作った犬頭とは話が合いそうだ。
話が通じないのが本当に悲しい。
会話が出来れば、様々な情報交換と共に改善提案が出来るのだが。

決して不味いわけではない。
ただ、薄味の塩一筋の味付けは、最初は美味しく感じた。
だが、それだけでは流石に飽きる。
香辛料が欲しい。
汁物では気がつかなかったが、焼いた犬肉にはかなり血生臭さを感じた。
血抜きがうまくいかなかったか、殺す直前に急激な運動をさせたせいだろう。
コショウかニンニク、各種ハーブを効かせてやれば、多少の血生臭さも逆に味わいに変わるのだが・・・・・。
惜しいと思う。

真昼間から呑む酒は美味い。
それが大自然に包まれながら呑むというのは、実に風流じゃないか。
美味さが5割り増しになる。
因みに、俺の数少ない趣味の一つに、アウトドアクッキングがある。
キャンプ場や、火が使える公園に焚き火台や、ダッチオーブンと呼ばれる鋳物製の鉄鍋を持ち込んで、昼から酒盛りだ。

ダッチオーブンは勿論、ロッジ製。
このメーカーはダッチオーブン愛好家、ダッチャーならばこれしか使わないと言っても良いほどの老舗のメーカーだ。
ダッチオーブンは、一部例外はあるが鋳物だ。
鋳造によって作られる。
下手なメーカーの物を買うと、内部にすが入っていたり、目に見えないクラック、鍋と蓋が上手く合わないことがある。
ロッジはそれが無い。

何年も使えばわかるが、ロッジは良いのだ。
ノウハウが違う。
外見、機能は地味の一言に尽きるが、故に無駄が無い。
それが良い。
手入れが楽でさび難いステンレス製も良いが、それでも鋳物のロッジが良い。

ダッチオーブンは上手く使えば何十年も持つ。
親から子へ、孫に受け継がれていくダッチオーブンも珍しくないほどだ。
最初は銀色だった鉄鍋が、使えば使うほどに黒くなる。
黒くなればなるほどに、料理が失敗しなくなる。
勿論、本人が慣れてきたというのもある。

だが、鍋も使えば使う程、馴染むのだ。
そして、ダッチオーブンは黒くなったら一人前。
艶やかに黒光りするダッチオーブン、通称ブラックポットは、まさしく宝だ。
ダッチャーがよく言う、少し下品な冗談がある。
「嫁とピックアップトラックは貸せるが、ブラックポットは貸せない」
それくらいブラックポットは、本人には価値があるということだ。

ダッチオーブンは何でも出来る。
鉄鍋なので蒸す、焚く、煮る、揚げるは当たり前。
蓋を裏返せば、フライパンになる。
肉厚の鋳物は保温が凄い。
ステーキも絶妙な加減で焼ける。
重い蓋は圧力鍋効果をもたらし、火にかけておけば勝手に調理してくれる。
工夫次第では、燻製すらも出来る。
それは鍋の形をした万能調理器具といえるほどだ。

さて、そんなにわけで熱烈にダッチオーブンのことを思っている。
今、猛烈にダッチオーブンが使いたいのだ。
犬肉のオイルフォンデュー、犬肉の岩塩包み焼き、蒸し犬肉、犬の角煮等様々な創作犬肉メニューが脳内を埋め尽くす。
肉の臭みを消しつつ、旨味を味わえるメニューは幾らでもある。
別にダッチオーブンを使わなくても、幾らでも作れる。
犬肉の粘土包み焼き、犬肉シュハスコ、犬肉の木の葉包み焼き、犬肉の熱薫等、塩さえあれば何でも出来る。

調理器具と塩と香辛料が欲しい。
それさえあれば、満足な食生活が出来る。

何より、今満足できる！
ダッチオーブンの製作は無理だが、ちょっとした工夫で更に犬肉が美味くなる方法は幾らでも思いつく。
調理した犬頭に何とか伝えたい。
そうすれば、更に美味しい食事が食べれるはずだ。
ああ、言葉が通じればなあ。

フィールドクッキング（後書き）

泡盛呑みつつ、趣味のアウトドアクッキングを思い浮かべながら書きました。
ダッチオーブンでローストチキン作りたいです・・・・。
もっと暖かくならないかなあ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2437p/

異界のマークスマン

2011年2月22日02時25分発行